

かんなり。

【煽動】おだてて事を起さしむ。
【煽儀】おこす。さかんなり。潘岳「聲勢沸騰、種落煽儀」。

【燂】エフ。爲楓切。緝。
盛んなる貌。

【焮】ケ、ケ、許既切。未。
草を炙りて焼く、やくのび。

【焯】シヨク、ソク。相即切。職。
①さゆ、けす、やむ、ほろぶ（亡）
②うづみびきえしむ、けす。

【焔】ウツ、ウツ。烏没切。月。
①ウツ。烏没切。元。②烏没切。元。③ウツ。烏没切。元。④ウツ。烏没切。元。⑤ウツ。烏没切。元。

【焇】ウツ、ウツ。烏没切。月。
①ウツ。烏没切。元。②烏没切。元。③ウツ。烏没切。元。④ウツ。烏没切。元。⑤ウツ。烏没切。元。

【焈】ウツ、ウツ。烏没切。月。
①ウツ。烏没切。元。②烏没切。元。③ウツ。烏没切。元。④ウツ。烏没切。元。⑤ウツ。烏没切。元。

【焉】ウツ、ウツ。烏没切。月。
①ウツ。烏没切。元。②烏没切。元。③ウツ。烏没切。元。④ウツ。烏没切。元。⑤ウツ。烏没切。元。

【焊】ウツ、ウツ。烏没切。月。
①ウツ。烏没切。元。②烏没切。元。③ウツ。烏没切。元。④ウツ。烏没切。元。⑤ウツ。烏没切。元。

のほ（炎氣）さらす（暴）かわく、かわかす（燥）あぶる。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

之力、虎狼之心、蠶食諸侯、

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

十一書

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【熾】柳宗元「寧知世情異、嘉穀坐熾熾」。

【爨】かまど(竈)かしく(炊)の訓義の●に同じ。
 【爨婦】煮たきする女。蘇軾「闕食惟應爨婦知」
 【爨婢】煮たきする下女。范成大「爨婢請淘酒米」

爪部 (爪)

部首

【爪】①サウ、セリ。御絞切。巧。②つめるにさる(握)、とる(取)。説文に「手を覆ふを爪といふ」
 【爪牙】つめときばと。自衛の具にいふ。詩經に「祈父子、王之爪牙」
 【爪角】つめとつのと。韓非子に「民知虎兇之有爪角也、而莫知萬物之盡有爪角也」

四畫

【爬】ハ、ベ。蒲巴切。麻。かく(搔)、とる(把)。
 【爬背】せなかをかく。白居易「支分閒事了、爬背向陽眠」
 【爬痒】かゆきをかく。(搔痒)。麻姑山記に「經意其可爬痒」
 【爬脚】かきけつる。周必大「公來開別墅、草莽手爬脚」

【爬蟲類】(動)皮膚に一種の甲鱗を被り、爬行する冷血動物、即ち、へび、かめ、とかげ、わにの類。
 【爬羅剔抉】廣く人才を探し用ふる義。韓愈「爬羅剔抉、刮垢磨光」
 【至】①ジン、ニン。如林切。侵。②イ、ン。余箴切。侵。もとも。

爭

【爭】サウ、シヤウ。側聲切。庚。①あらそふ、あらそひ(をさむ)。(治)②辯す(いさむ)。(諫)③ひく(引)。韻會に「俗に、争に作るは非なり」廣韻に「本、諍に作る、諍諍なり、止なり」
 【争子】言を枉げず諍むる子。孝經に「父有争子、則身不陷於不義」
 【争友】言を枉げず諍むる友。孝經に「士有争友、則身不離於令名」
 【争臣】言を枉げず諍むる家来。孝經に「天子有争臣七人、雖亡道、不失去天下」

五畫

爰

【爰】エン、チン。羽元切。元。①いかる(怒)②、に(日)③かふ(易)④ゆるやか(緩)⑤かなしむ(哀)⑥うれふ。
 【爰爰】ゆるやかなる貌。詩經に「有兔爰爰、雉離于羅」

八畫

爲

【爲】①ホ。扶雨切。巽。②子(爲)切。支。③子(爲)切。眞。④さす、す、なす、なる、なむ(治)⑤はたらき、しわざ(たり)⑥たすく(助)⑦よる(縁)⑧あづかる(與)⑨まもる(護)⑩ため、わけ、ゆる(せ)らる、らる。
 【爲人】うまれつき。史記に「禹爲人敏給克勤、其德不遠、其仁可親」
 【爲政】政治をおこなふ。孟子に「爲

父部 部首

【父】フ、ホ。扶雨切。巽。①ちち②おきな(老叟)③老年の男子の美稱(おやち(野老))
 【父母】ちちとははと。轉じて、人を尊び稱し、根本の義、又は、天地の假稱とす。詩經に「樂只君子、民之父母」
 【父兄】父と兄と。論語に「出則事公卿、入則事父兄」
 【父老】としより。老人。宋史に「巡幸所過、賜父老綉袍茶帛」
 【父事】尊敬すべき人に對し父として、これにつかふ。漢書に「陛下父事天母、事地子、養黎民」
 【父祖】ちちとちちと。又、せんぞ。晉書に「我父祖名播四海、寧不知耶」
 【父族】ちち方のやから。周禮に「再命齒于父族」
 【父執】父の友。杜甫「怡然敬父執、問我來何方」
 【父道】ちちのみち。禮記に「天子修男教、父道也」
 【父母國】ふるさと。孟子に「邇邇我

政不難、不得罪于巨室」
 【爲問】しばらくして。孟子に「夷子憮然、爲問曰、命之矣」
 【爲壽】孟を獻じて長命を祝す。宋史、王隨傳に「爲京西轉運副使、父母家洛中、眞宗賜詩寵行、以羊酒束帛、令過家爲壽」
 【爲之辭】口實をつくる。孟子に「今之君子、豈徒順之、又從而爲之辭」
 【爲表裏】内外互に相たすく。漢書に「中書令弘恭、石顯、久典樞機、明習文法、亦與車騎將軍高爲表裏」
 【爲魚肉】人の食ひものとなる。史記に「樊噲曰、如今人方爲刀俎、我爲魚肉、何辭」
 【爲天下戮】戮は刑戮、又は戮辱なり。天下中の人と共に戮する意。戰國策に「身死國亡、爲天下戮」
 【爲虎傅翼】猛惡の人に威勢を加ふるをいふ。淮南子に「今乘萬民之力、而反爲殘賊、是爲虎傅翼」
 【爲鬼所笑】運命を知らざる者をあざけるにいふ。事文類聚に「宋劉伯龍歷位九卿、郡守、賞饗尤甚、常在人家、慨然、將營一宅、一鬼在傍、撫掌大笑、伯龍歎曰、貧窮固有命、乃復爲鬼所笑也、遂止」
 【爲淵敲魚】亂暴の君が仁者

行也、去父母之國也。

四 畫

【爸】 ハ、バ。蒲可切。替。ハ、ハ、ハ。必駕切。馬。ちち(父)。正字通に「夷語に老者を稱して、ハハ、或は、巴巴となす、後人因りて父を加へて爸字と作す」

六 畫

【爹】 タ、ダ。屠可切。替。ちち(父)。【爺】 ヤ、爺の古文字。

九 畫

【箸】 シ、セ。之者切。麻。【爺】 祖母の夫。ちち(父)。ヤ、エ。以遮切。麻。ちち(父)。

父 部

部 首

【爨】 カ、ウ、ゲウ。胡茅切。看。後教切。【爨】 爨の跡をなす六つの畫段の稱。

四 畫

【效】 イ。演爾切。紙。カ。力。凡。切。紙。レイ、ライ。郎計切。霧。布き明かなる貌。明白の形象。第二位の爨。とどまる(止)。かく(系)第二位の爨。

七 畫

【爽】 サ、ウ。疎兩切。養。さわやか。あきらか(明)はげし(烈)、たけし(猛)、たかふ(差)あやまつ(過)たかし、又、たふとし(やぶる)敗、ほろぶ(亡)物事を分別する能力なき病。爽快。さわやかに。こころよし。爽氣。さわやかなる。こころ。韓偓「西山爽氣生襟袖」

十 畫

【爾】 シ、ニ。兒氏切。紙。アイ、ナイ。乃禮切。養。なんぢ。しかく(しかり)然。ち

月 部

かし(遷に通ず)の(み)耳。うつつる(移)華の盛んなる貌。おほし(満)する字に加へ用ゐる助字。みつ(満)【爾汝】 人を輕蔑する語。孟子に「人能充無受爾汝之實、無所往而不為義也」親友を爾汝の交といふ。文士傳に「補衡有逸才、與孔融、作爾汝交、時衡年二十餘、融年已五十」【爾祖】 汝のせんぞ。(乃祖)。詩經に「王之蓋臣、無念爾祖」【爾曹】 なんぢら。陶翰「真悔不レ知ト、游隨共爾曹」

部 首

四 畫

【月】 シ、ウ、ザウ。疾羊切。陽。ほ(爨)牀の省字。木を判つ、わかつ。

四 畫

【牀】 シ、ウ、ザウ。仕莊切。陽。ゆか、と、ねど、こしかけ(井餘)物を安置する具。【牀】 しとね。潘岳「寢伏牀學、念在朝廷」【牀】 こしかけ。ゆか。五代史に「乃使人題其所服器皿牀」【牀】 しとね。張衡「以造物爲牀」

父母、以天地爲牀。

五 畫

【牀】 セウ。市昭切。蕭。ゆか(牀)ながし(浴牀)。シヨ、ソ。壯所切。語。粗に同じ。

六 畫

【桃】 テウ、テウ。徒了切。篠。ゆかいた(牀子)。サウ。則郎切。陽。

九 畫

【牂】 さかんなり。ゆめひつじ(牝羊)異様の状をなす雲。ふなつなぎ。【牂】 盛んなる貌。詩經に「東門之楊、其葉牂牂」

十一 畫

【牂】 テフ、テフ。徒協切。葉。ゆかいた、すの(牀版)。ト、エ。餘封切。冬。牂に同じ。

十三 畫

【牆】 シヤウ、ザウ。才良切。陽。かき(垣)板を飾る衣。【牆】

片 部

部 首

【片】 ハン。匹見切。霰。かたかた、かたひら、きれ、かた(茶の芽葉)片に同じ。六書正譌に「俗に、片を作るは非なり」【片】 ひるがへる貌。又、きれきれなる貌。庾信「片片紅顏落、雙雙淚眼生」【片石】 かたわれのいし。五代史に「當遣二龍、揭片石」【片言】 かたこと。文賦に「立片言」而居要、乃一篇之警策」【片雨】 一方にのみ降るあめ。岑參「江村片雨外、野寺夕陽邊」【片紙】 きればしのかみ。宋史、汪若海傳に「高宗嘗以片紙書若海名」【片時】 わづかのあひだ。かたととき。

版 部

四 畫

【版】 ハン、ベン。布縮切。潛。ふた(簡牘)いたひがむ(餅)、そむく(反)戸籍、名簿八尺の長さ、又、二尺の廣さ。【版】 版は月籍、圖は地圖、領地の義なり。宋史に「上所降蕃部版圖、得地二千餘里」【版】 牆板と杵と。土功に用ゐる具。漢書に「項王伐齊、身負版築」板と板との間に土を入れてつきかたむること。孟子に「傳說舉子版築之聞」【版】 ものかくふた。劉禹錫「折堅木、負墻而北之、其製如版」【版籍】 土地と人民と。唐書、楊炎傳に「賦不加斂而増人、版籍不造而得」其虛實也。

【牛驥同皁】賢者が不肖者と同一の待遇を受くるをいふ。鄒陽「使不羈之士與牛驥同皁」

二 書

【牝】①ヒン、ピン。吡忍切。軫。②ヘン、ペン。婢善切。鉄。

【牝】①め、めす。たに(穀谷)。②けものめすとす。詩經疏に「日有剛柔、猶馬有牝牡」

【牝】①北。北の位、太白星南にあり、歳星北にありをいふ。晉書に「太白在南、歳星在北」

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牝】①牝牡、年殺大熟。②牝牡、年殺大熟。③牝牡、年殺大熟。

【牟利】利をむさばる。鹽鐵論に「物騰踊、則商賈牟利自市」

三 書

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牝】①シユン、ジュン。詳選切。眞。②おそし。なる、ならず(馴)。

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

四 畫

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【牟】①たのみ(聊)をほるか(遂)をくだるか(穩)をかむふちまい(す(渡))

【輔】①二歳の牛。身の長き牛、一説に、牛の足の長大なるもの。

【犖】①フン、ホン。方閑切。間。をどりふむ。

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【牧】①ホク、モク。莫六切。屋。まき、まさば。やしなふ、かふ

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

【犖】①國のはて。左傳に「不有行者、誰扞牧園」

〔狀〕

●シャウ、ザウ。助亮切。漢。まてがみ、かきつけのふ(陳述)。正字通に「俗に、状に作るは非なり」(狀元)云々。進士に及第して第一番となりたる人。宋史、呂大忠傳に「大忠謂曰、狀元云者、及第末三除官之稱也」(狀貌)云々。かほかたち。史記に「呂公者好相人、見高祖狀貌、因重敬之」(狽)云々。ギン、ゴン。語斤切。文。擬引切。軫。●大のかまんとする貌。●犬の吠ゆる聲。●あらそふ。●狽に同じ。●犬の吠ゆる聲。●ナチ。女滑切。點。●納に同じ。●イ。余準切。軫。●匈奴の別號(狽)云々。●キヤウ、ガウ。巨王切。陽。●渠放切。漢。●クワク。局縛切。藥。●くるふ。●さちがひ。●みだりがはし。●たけし。●さわぐ。●躁。●驚に同じ。●心そのみに専一にして進むこと。●まどふ。●輒く妄に爲す。●犬の走る貌。●狂夫。●氣のくるへるを。●漢書に「狂夫之言、聖人擇焉」(狂犬)云々。●くるひてかみつくいぬ。●阮籍。●狂犬之暴怒。●きちがひ。●じみたる書生。●齊

〔狽〕

●東野語に「上曰、此狂生也」(狂言)云々。●ものぐるはしきことば。●杜牧「忽發狂言、驚滿坐」●我國にて、古代のわざなきの流派、中世、田樂などに附屬して起りしが、今日にては専ら能樂の間に附屬して起りしが、蘇軾「詩酒淋漓出狂怪」云々。●きくるはし。●蘇軾「詩酒淋漓出狂怪」云々。●物くるはし。●ほしいままなり。●晉書に「此兒狂勃、宜早除之」(狂風)云々。●くるひかぜ。●杜甫「霹靂閃閃兼狂風」云々。●くるひみだる。●後漢書に「故狂疾乘間、相誑誤耳」(狂恣)云々。●くるはしく氣まななり。●晉書に「此狂恣不肅之咎也」(狂悖)云々。●くるひさかふ。●國語に「有狂悖之言、有眩惑之明」(狂虐)云々。●ものぐるはしくあらし。●南史に「蒼梧王狂虐、左右不自安」(狂馬)云々。●くるひたる馬。●淮南子に「狂馬不觸木、劉狗不自投於河」(狂氣)云々。●さちがひ。●じみたるさま。●又、みだりに進取する氣象。●韓愈「雲夫吾兄有狂氣」(狂猖)云々。●志高くして行掩はざるものと知未だ及ばずして守ること餘りあるものと。●論語に「子曰、不得中行而與之、必也狂狽乎」

〔狽〕

●狂疾。●きちがひ。●韓愈「抑而行之、必發狂疾」(狂惑)云々。●くるひまどふ。●魏子に「夫狂與惑者、聖人之戒也」(狂雪)云々。●風に吹かれてくるひ舞ふゆき。●李燾「狂雪隨風撲馬飛、惹煙無力被風吹」(狂斐)云々。●進取の氣に富み文飾あり。●梅堯臣「下言狂斐頗及古」(狂童)云々。●さちがひ。●じみたるわらべ。●詩經に「狂童之狂也且」(狂飲)云々。●くるひのむ。●蘇舜欽「放歌狂飲不知曉、爛漫酌客山岳頽」(狂歌)云々。●さちがひ。●じみたるうた。●張九齡「接輿狂歌而譏激」(狂劇)云々。●くるひたばむる。●韓愈「狂劇時穿壁」(狂恣)云々。●思慮なくおろかなり。●後漢書に「是我幼時狂恣之行也」(狂醉)云々。●甚だしくふ。●李中「靜吟窮野景、狂醉養天真」(狂瞽)云々。●よこしまにしてくらし。●南史に「盡狂瞽之說、披肝膽之誠」(狂藥)云々。●酒をいふ。●范質「戒爾勿嗜酒、狂藥非佳味」(狂簡)云々。●志大にして事に略なり。●論語に「狂簡斐然成章」(狂癡)云々。●くるひておろそかなり。●きちがひ。●黃庭堅「人生會面難、取醉聽

五 畫

〔狂〕

●ヒ、ビ。質悲切。支。●狂に同じ。●たねき。●獸類の走る貌。●クキ、キヤウ。古閑切。錫。●犬の物を視る貌。●援の屬(狂)云々。●鳥の翅を張り動す貌。●はる(張)云々。●語其切。支。●スキ、ズキ。●道綬切。支。●シ、ジ。●俟前切。支。●ケン、ケワン。巨員切。先。●いかる、あらそふ。●いかる。●獸の角の貌。●平かならざる貌。●難に同じ。●シウ、ジュ。之戌切。遇。●一種の犬。●セイ、シヤウ。師庚切。庚。●程に同じ。●シヤウ、シヤウ。●ハウ、ベウ。薄交切。肴。●獸の名。●カフ、ケフ。轄甲切。洽。●なる。●ならふ。●ちかづく。●あなどる、かるんす(輕)。●もてあそぶ。●たはむる(戲)。●己に近づけ親しむ、ならす。●かはる。●なれたはむる。●白居易「官舍可狎弄、昏頰聊激澣」(狎近)云々。●なれちかづく。●韓偓「燕俠冰霜難狎近」(狎侮)云々。●なれあなどる。●書經に「狎侮

〔狽〕

●狂。●きちがひ。●張籍「聞客語聲、知貴賤、對花歌詠似狂」(狂謔)云々。●くるひさわぐ。●王令「愛之不、可入、抵觸發狂」(狂瀾)云々。●勢たけるなみ。●韓愈「障百川而東之、迴狂瀾於既倒」(狂擲)云々。●くるひみだる。●楚辭に「擲塵垢之狂擲兮、除穢累而反眞」(狂)云々。●ガウ、ニユ。女久切。有。●女救切。宥。●ガク、ニク。女六切。屋。●なる。●ならふ。●ただす。●あしあ。●ゆび(指)。●狐狸。●なる。●一種の獸。●おんになる。●後漢書に「陛下每引災自厚、不責臣司、臣司粗恩、莫以爲責」(狽)云々。●なれならふ。●王安石「上狽習而知其事、下服馴而安其教」(狽)云々。●テキ、ゲヤク。徒歷切。錫。●とほし(遠)。●のぞく、はらふ。●又、なさむ。●はやし、いそがはし。●賤しき官吏、したざむらひ。●えびす。●身體大にして力すぐれたる鹿。●程に通ず。●易に通ず。●西方野蠻國の通辭人。●禮記に「東方曰寄、南方曰象、西方曰狽、南方曰狽」(國字)云々。●獸の名、ちん。

〔狽〕

●君予、固以盡人心。●晉書、桓伊傳に「晉營尤甚、惟狽昵詔邪」(狽愛)云々。●なれあひす。●北史に「被文襄狽愛、數歌舞戲、諱於前」(狽獸)云々。●なれたるけもの。●沈炯「馴鳥逐飯聲、狽獸繞禪牀」(狽獸多死)云々。●侮り玩べばその禍を受くることあるをいふ。●左傳に「水懦弱民狽而獸之、則多死焉」(狐)云々。●コ、ウ。戸吳切。虞。●きつね。●わきが。●(腋臭)。●うたがひまどふ。●元稹「狐惑意顛倒」(狐梨)云々。●「動」とんぼの異名。●蜻蜒爾雅、疏に「蜻蛉一名虹蜺、一名負勞、江東呼之、其由也與」(狐疑)云々。●うたがひ。●史記に「孟賁之狐疑、不知庸夫之必至也」(狐白裘)云々。●きつねの白きかはころも。●史記に「願得君狐白裘」(狐濡尾)云々。●小狐水を濟らんと、始は勇み進みて尾をぬらししも、遂に濟

〔狽〕

●狂。●きちがひ。●張籍「聞客語聲、知貴賤、對花歌詠似狂」(狂謔)云々。●くるひさわぐ。●王令「愛之不、可入、抵觸發狂」(狂瀾)云々。●勢たけるなみ。●韓愈「障百川而東之、迴狂瀾於既倒」(狂擲)云々。●くるひみだる。●楚辭に「擲塵垢之狂擲兮、除穢累而反眞」(狂)云々。●ガウ、ニユ。女久切。有。●女救切。宥。●ガク、ニク。女六切。屋。●なる。●ならふ。●ただす。●あしあ。●ゆび(指)。●狐狸。●なる。●一種の獸。●おんになる。●後漢書に「陛下每引災自厚、不責臣司、臣司粗恩、莫以爲責」(狽)云々。●なれならふ。●王安石「上狽習而知其事、下服馴而安其教」(狽)云々。●テキ、ゲヤク。徒歷切。錫。●とほし(遠)。●のぞく、はらふ。●又、なさむ。●はやし、いそがはし。●賤しき官吏、したざむらひ。●えびす。●身體大にして力すぐれたる鹿。●程に通ず。●易に通ず。●西方野蠻國の通辭人。●禮記に「東方曰寄、南方曰象、西方曰狽、南方曰狽」(國字)云々。●獸の名、ちん。

五 畫

〔狽〕

●狂。●きちがひ。●張籍「聞客語聲、知貴賤、對花歌詠似狂」(狂謔)云々。●くるひさわぐ。●王令「愛之不、可入、抵觸發狂」(狂瀾)云々。●勢たけるなみ。●韓愈「障百川而東之、迴狂瀾於既倒」(狂擲)云々。●くるひみだる。●楚辭に「擲塵垢之狂擲兮、除穢累而反眞」(狂)云々。●ガウ、ニユ。女久切。有。●女救切。宥。●ガク、ニク。女六切。屋。●なる。●ならふ。●ただす。●あしあ。●ゆび(指)。●狐狸。●なる。●一種の獸。●おんになる。●後漢書に「陛下每引災自厚、不責臣司、臣司粗恩、莫以爲責」(狽)云々。●なれならふ。●王安石「上狽習而知其事、下服馴而安其教」(狽)云々。●テキ、ゲヤク。徒歷切。錫。●とほし(遠)。●のぞく、はらふ。●又、なさむ。●はやし、いそがはし。●賤しき官吏、したざむらひ。●えびす。●身體大にして力すぐれたる鹿。●程に通ず。●易に通ず。●西方野蠻國の通辭人。●禮記に「東方曰寄、南方曰象、西方曰狽、南方曰狽」(國字)云々。●獸の名、ちん。

【狐】 狐は死にてなほ己の窟ありし丘に首を向く。木を忘れざるに喩ふ。楚辭に「狐死必首丘」。故郷を思ふに喩ふ。後漢書に「能無三依風首丘之思哉」。

【狐裘蒙戎】 狐裘は狐のかげごもにて貴人の服。蒙戎は亂るる貌。貴人の亂るるに喩ふ。詩經に「狐裘蒙戎。匪車不東。叔兮伯兮。靡所與同」。

【狒】 ヒ、ビ。扶沸切。未。鼓動する貌。揚雄「惟彈張其狒」。

【狢】 カウ、ケウ。古巧切。巧。まじはる。みだる(狢)。そのなふ害(狢)貌のみにて實なきこと。すやか(狢)の名。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 イウ、ユ。余救切。宥。ましら、なながさる、くろさる。ケツ、ケチ。許月切。月。はしる。

【狨】 熊虎の子の稱。無門關に「懸羊頭。賣狗肉」。

【狨】 趙王倫の黨みな卿相にのほり、奴卒に至るまで爵位を得たるを、時人諷りて「紹不足狗尾續」といひしに起る。精美なるものに續ぐに粗製なるものを以てするに喩ふ。晉書、趙王倫傳に見ゆ。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 わるがしこくして人を欺く。葛洪「異法之盛。其人狨」。

【狨】 ショ、ソ。親去切。御。てながさる。やまこ。わら。がしこく。うかがふ(伺)。れらふ。

【狨】 唐書、盧杞傳に「狨害陰毒。天下無不痛憤」。

【狨】 唐書、盧杞傳に「狨害陰毒。天下無不痛憤」。

【狨】 唐書、盧杞傳に「狨害陰毒。天下無不痛憤」。

【狨】 唐書、盧杞傳に「狨害陰毒。天下無不痛憤」。

【狨】 唐書、盧杞傳に「狨害陰毒。天下無不痛憤」。

【狨】 唐書、盧杞傳に「狨害陰毒。天下無不痛憤」。

〔犬部〕 狨 狨 狨 狨 狨 狨 狨 狨 狨 狨

子以獨立不懼」
 【獨行】 一人ゆく。盧綸「幽人好獨行」
 【獨坐】 ひとり坐す。王維「獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯」
 【獨吹】 ひとりにて笛を吹く。庾信「惟有龍吟笛、桓伊能獨吹」
 【獨步】 ひとりあゆむ。漢書に「便衣獨步出營」
 【獨秀】 特別にひいづ。(特秀)。宋史に「松柏挺然獨秀者也」
 【獨知】 ひとりにてさとる。淮南子に「夫將者必獨見獨知」
 【獨酌】 ひとり酒をくむ。蘇軾「醉哦旁若無、獨酌一尊綠」
 【獨活】 ひとり音をかなづ。庚國孫「芝谷蕭寥、鳴琴獨奏」
 【獨看】 ひとりにて見る。杜甫「雪嶺獨看西日落」
 【獨笑】 ひとりふむ。蜀志に「欣然獨笑、以忘寢食」
 【獨酌】 ひとり酒をくむ。南史、顏延之傳に「布衣蔬食、獨酌郊野、當其爲適、傍若無人」
 【獨專】 己がまゝに行ふ。文同「塵襟既暫解、勝境乃獨專」

【獨尊】 只己のみ他にすぐれて貴し。傳燈錄に「天上天下、唯我獨尊」
 【獨處】 ひとり居る。宋玉「聖人瑰意琦行、超然獨處」
 【獨善】 己のみをよくす。尹文子に「爲善使三人不能得從、此獨善也」
 【獨暇】 おのれ一人ひまなり。晁補之「復古志尙奇、衆競方獨暇」
 【獨稱】 唯そのもののみたへらる。淮南子に「帝王者多矣、三王獨稱」
 【獨語】 ひとりこつ。ひとりこと。白居易「獨行獨語曲江頭」
 【獨樂】 ひとりたのしむ。孟子に「獨樂樂、與人樂樂、孰樂」
 【獨學】 師友なくひとりにて學ぶ。禮記に「獨學而無友、則孤陋而寡聞」
 【獨擅】 己の思のままにす。戰國策に「趙獨擅之、功成名立、利附焉」
 【獨斷之明】 定之于一朝。
 【獨木舟】 大なる木をふぐりて造りたる船。うづぶれ。まるきぶね。
 【獨木橋】 まるきばし。唐志に「獨木之橋、曰榑亦曰柶」
 【獨知契】 契は約なり、約は雙方知り居るべきに、獨り之を知るは合意の約に非らざる義。戰國策に「君之使最爲太子、獨知之契也」

【獨眼龍】 唐書に「僖宗時、黃巢造反、李克用破之、時人以三其一目眇而有勇、號爲獨眼龍」
 【獨掃草】 植。うじ。
 【獮】 古外切。秦。クワイ、カチ。戸八切。黠。
 【獮】 みる(擾)。わるがし、こし。獮に同じ。
 【獮】 わるがし。五代史に「皆庸懦不肖、傾險險猾之徒」
 【獮】 虚檢切。瑛。レン。力驗切。黠。
 【獮】 支那北方のえびす。カク、カク。胡買切。黠。
 【獮】 一種の獸。つよし。一種の獸。
 【獮】 支那北方のえびす。カク、カク。胡買切。黠。
 【獮】 一種の獸。つよし。一種の獸。
 【獮】 支那北方のえびす。カク、カク。胡買切。黠。
 【獮】 一種の獸。つよし。一種の獸。

十四畫

【獮】 セン。息淺切。鉄。
 【獮】 あきが(秋期の獮)。クン、ゴン。許云切。文。
 【獮】 夏時代の匈奴の名稱(獮)。ヒン、ピン。毗賓切。眞。
 【獮】 かはをそ。
 【獮】 (動)かはをそ。韓愈「爲獮獮之笑者、蓋十八九矣」
 【獮】 ダウ、ニヤウ。尼耕切。庚。あし(患)。

【獲】 クワク、ゲヤク。胡伯切。陌。化切。禡。ゴ、ゲ。胡故切。遇。クワ、ゲ。胡とる、とる。とり。う(得)。うばひ。しもべをんな(下婢)。とる、とり。かる、うばふ、とる。
 【獲麟】 孔子春秋を著して「哀公十四年春、西狩獲麟」といふ句にて、筆をとどめたり、よりにて後人、獲麟を絶筆の意に用ゐる。
 【獲育徳】 鳥獲・夏育の如き勇力ある人のなから。西京賦に「乃使黃中之士、獲育之徳」
 【獵】 レフ。獵の俗字。
 【獮】 下ウ、メ。奴豆切。宥。レフ。獵の名。
 【十五畫】
 【獵】 レフ、ロフ。長涉切。葉。かり。か。とらふ(捕)。しへたぐ(う)。かす(震)。とる(攪)。ふ(歴)。ふむ。ゆ(獵)。甲の後を覆ひたる龜をつぐ、ついで。
 【獵犬】 かりに用ゐるいぬ。王維「牧童望村去、獵犬隨人還」
 【獵戶】 かりうどの家。又、かりうど。范成大「獵戶遠張罾」

【獵犬】 かりうど。蘇軾「麻糍短後隨獵犬、射戈獵兔供朝哺」
 【獵較】 田獵して獲物の多少を較す。孟子に「魯人獵較、孔子亦獵較」
 【獵獵】 飛動する貌。吳均「皎皎日將上、獵獵起微風」
 【獲】 ダウ、ネウ。奴巧切。巧。ウ、ウ。於求切。尤。ドウ、メ。奴侯切。尤。ダウ、ノウ。奴刀切。豪。犬の驚く貌。さる(孫)。たばむる(戲)。いぬ(犬)。さる(孫)。
 【獮】 ルキ。魯軌切。紙。むささび(飛鳥)。
 【獮】 クワウ、ワウ。古猛切。梗。クワイ、キヤウ。俱永切。梗。
 【獮】 あらさいぬ。あらし、あし。
 【獮】 あらあらしくしてもとる。唐書に「獮戾有夷貊風」
 【獮】 あらくたけし。桂海巒志に「其人物獮悍、風俗荒怪」
 【獮敵】 わるだけきあた。後漢書に「欲修文戢戈、招降獮敵」
 【獮敵】 麤惡なる貌。漢書に「獮獮亡秦、滅我聖文」
 【獮敵】 わるづよきけもの。劉希夷「獮獸血塗地、巨人聲沸天」
 【獸】 シウ、ジュ。舒救切。宥。けたもの。ほじし(腊)。

【獸心】 獸類の如き心。いやしき心。禮記に「今人而無禮、雖能言、不亦禽獸之心乎」
 【獸音】 けもの如く養ふ。又、けもの。孟子に「愛而不敬、獸畜之也」
 【獸醫】 家畜の醫者。周禮に「獸醫掌療獸病、療獸瘡」
 【獸醫】 けものを入るるをり。南史に「據獸醫、進緒圻」
 【十六畫】
 【獮】 ロ、ル。落胡切。庚。韓國の駿犬の名。
 【獮】 レン。力延切。先。テン。澄。延切。先。タン、テン。直閑切。獮。止人切。眞。兎の走る貌。犬の草中を走る貌。獮。獮の木に緣る貌。
 【獮】 タツ、タチ。他達切。曷。かはをそ。
 【獮】 魚を以て祭りす。禮記に「孟春之月、獮祭魚」
 【獮】 轉じて、多くの書物を散亂したるさまにいふ。談苑に「李商隱爲文、多簡閱書冊、左右隣次、號獮祭魚」
 【獻】 ケン、ゴン。許建切。願。サ。桑何切。歌。魚羈切。支。たてまつる、ささぐ。たてまつる物。がしこし

〔賢〕の酒尊の名。疏く刻みたること。のり(儀)斗の魁及び杓の末の勺の形をなすこと。
 〔獻可〕君王に善言を上りて、その過失を補ふ。左傳に「晏子對公曰、君所謂可而有否焉、臣獻其否、以成其可、君所謂否而有可焉、臣獻其可、以去其否」
 〔獻民〕かしこき人。書經に「其大悖、典殷獻民」
 〔獻功〕出來上がりたるものをすすむ。周禮に「令諸侯春入貢秋獻功」
 〔獻身〕身命をささげて、全力をつくす。禮記に「事君先資其言、拜自獻其身」
 〔獻芹〕人に物を贈る謙辭。呂氏春秋に「野人美芹、願獻之至尊」
 〔獻供〕物をたてまつる。徐陵「提河獻供之侶、王城遇衆之端」
 〔獻春〕はるのはじめ(孟春)。王浚「翠僚荷恩澤、朱顏感獻春」
 〔獻納〕上にたてまつり入る。潘岳「愧無獻納、尸素以甚」
 〔獻賢〕善きをすすめ、惡しきをすすむ。君王を輔佐するは、三國名臣序贊に「以道佐世、出能勳功、入能獻賢、謀寧社稷」
 〔獻善〕善きことを上の人にすすむ。揚雄「獻善宣美、而議說是折」

〔獻酬〕酒杯をとりやりす。陶潛「提壺接賓侶、引滿更獻酬」
 〔獻歲〕正月元日。鮑照「獻歲發吾將行、春山茂春日明」
 〔獻謀〕はかりごとを奉る。忠經に「入則獻其謀、出則行其政」
 〔獻賜〕さかづきをささぐ。閑居賦に「稱萬壽以獻賜」
 〔獻饋〕おくりもの。圖畫見聞志に「受其獻饋湯養有差」

十七畫

〔獼〕おほざる(母猴)。支。禮記「體離朱之聰、視、姿才捷于獼猿」

十八畫

〔獾〕クワン。猪、又、豚に同じ。あなぐま。

二十畫

〔獲〕ケン、ゲン。虚檢切。瑛。きたのえびす(獵狍)。キヤク、カク。居縛切。藥。ケキ、キヤク。俱碧切。陌。おほざる(うづ(搏))。おほざる。前と同じ。

玄部

部首

〔玄〕ケン、ゲン。湖消切。先。くろ、あかぐる。あめ、そら(天空)かみ(上帝)みち(道德)も(樞極)老子の説きたるみち。おくふかし(静)やしま(曾孫の子)北方水焮に同じ。

〔玄〕深遠なる貌。蔡邕「仰之若華嶽玄玄焉」
 〔玄甲〕くろきよろひ。漢書に「戈矛成山林、玄甲曜日光」
 〔玄旨〕おくふかきむね。張嬪「靜室談玄旨、靜宵獨細聽」
 〔玄同〕彼我の區別なし。文中子に「無所樂、無所苦、無所喜、無所怒、萬物玄同」
 〔玄衣〕黒きうちに赤みを帯びたる色の衣。禮記に「周人冕而祭、玄衣而養老」
 〔玄妙〕おくふかく深遠なり。孟浩然「漸通玄妙理、深得坐忘心」
 〔玄武〕北方の神。唐六典に「紫宸殿之北面、曰玄武門、其內又有玄武觀」
 〔玄津〕佛のなしへ。頭陀寺碑に「釋網更維、玄津重禮」注に「釋網玄津、竝佛法也」

〔支〕おくふかし。任昉「辭賦清新、屬言支遠」
 〔支漢〕おくふかくしづかなり。沈約「神行燭支漢、帝旆委會虹」
 〔支旗〕黒くして赤みをおびたる色の旗。淮南子に「天子服蒼玉、建支旗」
 〔支端〕周代の朝服。禮記に「朝支端、夕深衣」
 〔支裳〕くろき色の服。後赤壁賦に「翅如車輪、支裳縞衣、戛然長鳴」
 〔支履〕おくふかきとく。書經に「玄德升聞、乃命以位」
 〔支駒〕(動)ありの異名。大戴禮に「蟻曰支駒」
 〔支談〕玄妙なる黄老の道の話。李白「玄談又絶倒」
 〔支静〕しづかなり。晉書に「海内無虞、萬國支静」
 〔支漆〕くろきうるし。元史に「置跌並用支漆」
 〔支學〕高妙なる學。北史、羊烈傳に「能言名理、以支學知名」
 〔支機〕不可思議なるたくみ。張說「金爐承道訣、玉牒啓支機」
 〔支斃〕くろきけころも。宋濂「山分秋色、侵支斃」
 〔支翮〕くろきばね。塘城集仙錄に「朝翔則翠羽支翮」

〔支〕おくふかし。任昉「辭賦清新、屬言支遠」
 〔支漢〕おくふかくしづかなり。沈約「神行燭支漢、帝旆委會虹」
 〔支旗〕黒くして赤みをおびたる色の旗。淮南子に「天子服蒼玉、建支旗」
 〔支端〕周代の朝服。禮記に「朝支端、夕深衣」
 〔支裳〕くろき色の服。後赤壁賦に「翅如車輪、支裳縞衣、戛然長鳴」
 〔支履〕おくふかきとく。書經に「玄德升聞、乃命以位」
 〔支駒〕(動)ありの異名。大戴禮に「蟻曰支駒」
 〔支談〕玄妙なる黄老の道の話。李白「玄談又絶倒」
 〔支静〕しづかなり。晉書に「海内無虞、萬國支静」
 〔支漆〕くろきうるし。元史に「置跌並用支漆」
 〔支學〕高妙なる學。北史、羊烈傳に「能言名理、以支學知名」
 〔支機〕不可思議なるたくみ。張說「金爐承道訣、玉牒啓支機」
 〔支斃〕くろきけころも。宋濂「山分秋色、侵支斃」
 〔支翮〕くろきばね。塘城集仙錄に「朝翔則翠羽支翮」

〔支〕おくふかし。任昉「辭賦清新、屬言支遠」
 〔支漢〕おくふかくしづかなり。沈約「神行燭支漢、帝旆委會虹」
 〔支旗〕黒くして赤みをおびたる色の旗。淮南子に「天子服蒼玉、建支旗」
 〔支端〕周代の朝服。禮記に「朝支端、夕深衣」
 〔支裳〕くろき色の服。後赤壁賦に「翅如車輪、支裳縞衣、戛然長鳴」
 〔支履〕おくふかきとく。書經に「玄德升聞、乃命以位」
 〔支駒〕(動)ありの異名。大戴禮に「蟻曰支駒」
 〔支談〕玄妙なる黄老の道の話。李白「玄談又絶倒」
 〔支静〕しづかなり。晉書に「海内無虞、萬國支静」
 〔支漆〕くろきうるし。元史に「置跌並用支漆」
 〔支學〕高妙なる學。北史、羊烈傳に「能言名理、以支學知名」
 〔支機〕不可思議なるたくみ。張說「金爐承道訣、玉牒啓支機」
 〔支斃〕くろきけころも。宋濂「山分秋色、侵支斃」
 〔支翮〕くろきばね。塘城集仙錄に「朝翔則翠羽支翮」

【玉權】賢人の死をいふ。三國名臣序贊に「先賢玉權於前、來哲攝執于後」。

【玉盤】玉かざりしたるたらし。漢武内傳に「以玉盤盛桃七枚」。

【玉齒】李羣玉、藤朧吐玉盤の異名。うつくしき齒。李白「粲然啓玉齒、授以鍊藥說」。

【玉釐】天子乃御玉釐。潘岳「天子乃御玉釐」。

【玉樹】すぐれたる人に喩ふ。晉書に「埋玉樹于土中、使人情何能已」。

【玉潔】たまの如くきよし。孫綽「素質玉潔、華藻金章」。

【玉璧】たまにてかざれるかべ。晉清商曲詞に「金瓦九重、玉璧珊瑚柱」。

【玉蕾】たまの如き花のつぼみ。珠帶「蕾潛玉蕾珠芽未足多」。

【玉燭】四時の氣候の調和する。備雅に「四時和謂之玉燭」。

【玉璣】たま。袁宏「西帝澄金字、東湖鑄玉璣」。

【玉嬰】うつくしきほつす。蘇軾「舞腰似雪金釵落、談詩如雲玉嬰舞」。

【玉嬰】たけのこの異名。蘇軾「駢頭玉嬰兒」。

【玉環】たまのわ。拾遺記に「物隄國獻黑玉之環」。

【玉環】薛の異名。劉禹錫「竹含天籟、清商樂、水繞亭臺、碧玉環」。

【玉爵】たまのさかづき。王炎「金鼎玉爵扶春筍、飲罷敲冰煮新茗」。

【玉頰】うつくしきかほ。庾肩吾「春花競玉頰、俱折復俱攀」。

【玉鏡】月の異名。許謙「鮑鮪稅駕紅塵息、玉鏡飛空天地白」。

【玉積】たまのほこ。左傳に「賂以玉積、玉積、玉積、玉積」。

【玉簪】たまのかんざし。四京雜記に「就取玉簪、搔頭」。

【玉璽】天子の御印。(御璽)。盧照隣「單子拜玉璽」。

【玉蟾】月の異名。劉孝綽「橫柯牛玉蟾、衰葉影金兔」。

【玉墨】たまにて造りたるかめ。歸田錄に「余家有玉墨、梅聖俞以爲碧玉」。

【玉饌】みことなる飲食物。左思「其宴居、則珠服玉饌」。

【玉露】うつくしきつゆ。李白「玉露生秋衣、流螢飛百草」。

【玉體】王者貴人のからだの敬稱。南史、梁武陵王傳に「以玉體、辛若行陣」。

【玉體】美人のからだ。傅休奕「玉體映羅裳」。

【玉鏡】たまのくつわ。宋樂章に「玉鏡息、金轡懷音」。

【玉山崩】人品の皎潔なる者が大醉したるさまを形容したる語。世説に「晉嵇康字叔夜、山濤言、叔夜爲人巖巖若孤松之獨立、其醉也、傀俄如玉山之將崩」。

【玉壺冰】たまのつばの、ほり。心の清きにいふ。鮑照「直如朱絲繩、清如玉壺冰」。

【玉石同碎】玉も石も共にくだく。善きも悪きも同じく亡ぶるにいふ。袁宏「滄海橫流、玉石同碎」。

【玉石同價】玉も石も同じひつに在り。賢愚一所に入りまじれるに喩ふ。楚辭に「玉與石而價同」。

【玉石俱焚】よき玉もよからぬ石も、同様にやけほる。善悪の差別なく害にかかるをいふ。書經に「火炎崑岡、玉石俱焚」。

【玉昆金友】人の兄弟を譽めていふ。宋書に「王銓美風儀、與弟錫、齊孝行、人曰、銓錫二玉、玉昆金友」。

【玉海金山】氣韻のけたかさをいふ。書言故事に「梁武帝曰、朱異器宇宏深、神表峰峻、金山萬丈、綠陟難登、玉海千尋、窺映不測」。

【玉不琢不成器】玉の質はもと美なれども彫琢を加へざれば器となりて用に應ずること能はず。禮記に「玉不琢不成器、人不學不知道」。

〔王〕

【王】子放切。陽。

【王】(一)國の君主、大諸侯。(二)帝室の男子の特稱。なま、かしら。人臣の最も高き爵位。大いなるもの稱。諸侯封を襲きたる時に天子に參朝すること。血統上一級すすみたるにいふ。さみとなること。又、ならしむること。ゆく(往)。さかんなり(盛)。

【王化】君主の仁徳によりて、自然と善良に化すること。晉書に「移風俗于王化、崇孝敬于人倫」。

【王父】父の父。爾雅に「父之考爲王父、父之妣爲王母」。

【王母】ばば。祖母。易經に「受茲介福于其王母」。

【王瓜】(補)からすうり。禮記に「孟夏之月、王瓜生、苦菜秀」。

【王臣】天子の家來。易經に「王臣蹇蹇、匪躬之故」。

【王車】天子のくるま。周禮に「王巡守則夾王車」。

【王佐】帝王のたすけ。後漢書に「王生一日千里、王佐才也」。

【王言】帝王のこゝば。禮記に「王言如絲、其出如綸」。

【王社】帝王の建てたる地神のやしろ。禮記に「王自爲立社、曰王社」。

【王命】帝王のおほせ。杜甫「使者分」。

【王命】羣公各典司。

【王帝】はばきき。爾雅、注に「王帝也、似黎其樹可爲掃帚」。

【王法】帝王のみち。汲冢周書に「敦行王法、濟用金鼓」。

【王政】帝王の行ふまつりごと。潘岳「學優則仕、乃從王政」。

【王室】帝王のいへ。書經に「爾有衆、同力王室」。

【王家】帝王の一門。書經に「王季其勤王家」。

【王旅】天子の軍隊。詩經に「王旅嗶嗶、如飛如輪」。

【王師】天子のいくさ。杜甫「哮啞小夢然、且願休王師」。

【王城】天子の居處。東京賦に「總風雨之所交、然後以建王城」。

【王孫】王者の子孫。楚辭に「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」。

【王略】君主のほかりごと。南史に「王略所互、九服率從」。

【王國】帝王の治むるくに。詩經に「斯皇多士、生此王國」。

【王路】君主のおきて。書經に「無有作惡、遵王之路」。

【王道】帝王のみち。書經に「無偏無黨、王道蕩蕩」。

【王猷】前に同じ。女史箴に「家道以正、王猷有倫」。

【王業】帝王のしごと。白居易「太宗意在陳王業、王業艱難示子孫」。

【王畿】王城附近の地。周禮に「職方氏辨九服之邦國、方千里曰王畿」。

【王餘】(動)ひらめの異名。爾雅、注に「比目魚、河東呼爲王餘」。

【王霸】王業と覇業と。孟子に「大則以王、小則以霸」。

【王佐材】帝王を輔佐するに足るはたらき。漢書、董仲舒傳贊に「劉向稱、董仲舒有王佐材」。

【王門俗】富貴に、ふる人。晉書、戴逵傳に「戴安道不爲王門俗人」。

【王者香】(植)蘭の異名。琴操に「孔子自衛反魯、幽谷中見蕪蘭獨茂、歎曰、蘭當爲王者香、今乃與衆草爲伍、乃止車援琴鼓之、託辭於香蘭云」。

【王者師】帝王の師範となるもの。孟子に「有王者起、必來取法、是爲王者師也」。

【王公大人】身分貴き人。韓愈「今之王公大人、惟執事可聞此言」。

【王良造父】王良と造父と、共に古の善く馬を御せし人。韓愈「若駟馬駕輕車、就熟路、而王良造父爲之先後也」。

【王事莫盥】王事は堅牢ならざるべからず、故に王事に執掌して暇な

【珍羞】めづらしき甘き物。後漢書に「詔曰、遠國珍羞、本以薦奉宗廟」。陸游「有客餽珍羞、發瓮驚絕奇」。陸游「珍酒」めづらしき酒。張載「未開珍酒出、于湘東」。

【珍寶】めづらしきみづかき。拾遺錄に「殊方珍寶、府無虛日」。

【珍貨】めづらしき財。後漢書に「多貧其珍貨、明瑞翠羽犀象瑁之屬」。珍寶「蘇軾」我昔在田間、寒庖有珍羞。

【珍惜】大切にする。耶律楚材「天上玉麒麟、英才可珍惜」。

【珍華】めづらしき華。宋史に「非珍華而取飾、將被服而有容」。珍瑞「杜甫」天下所休慶也。

【珍禽】めづらしき鳥。書經に「珍禽、獸、不畜於國」。

【珍裘】めづらしき皮。南史に「瓊管玉笏、碎以爲塵、珍裘織服、焚之如草」。

【珍聞】めづらしき事。唐書に「珍聞」武后出珍幣、建佛盧。

【珍器】めづらしき器。史記に「珠玉財寶、車甲珍器、盡收入于燕」。

【珍膳】めづらしき食物。周禮、注に「今時美物、曰珍膳」。

【珍錫】めづらしき錫。劉孝威「曲降隆慈、俯垂珍錫」。

【珍膳】めづらしき膳。史記に「故珍膳至、嘉穀興」。

【珍膳】めづらしき膳。禮記に「村盤既羅列、雞黍皆珍膳」。

【珍膳】めづらしき膳。後漢書に「南金和寶、冰執霧縠之縠、盈制珍膳」。

【珍膳】めづらしき膳。唐書に「與服食飯、皆光麗珍膳」。

【珍膳】めづらしき膳。論衡に「物之變隨氣、非得神草珍膳、食之而變化也」。

【珍膳】めづらしき膳。馮衍「忽道德之珍膳、分富貴之樂耽」。珍寶「史記」一收其珍寶貨財。

【珍膳】めづらしき膳。楊萬里「只嫌嶺外無珍膳、一味春蔬不直錢」。

六 書

【玳】カワ、ケウ。古孝切。效。玳の吉凶を占むに用ふる器（杯）。レイ、ライ。耶計切。霽。玳の屬。牡蠣の屬。佩刀の飾。

【珣】シユ、シユ。章俱切。虞。珣の玉の狀をなすもの。事物の美稱に用ふる。珣玉「霍山之珠玉焉」。珣珠「雷山之珠玉焉」。珣珠母「收珠母」。珣米「米圓圓白、樓桑箇箇青」。珣貝「蘭玉好芳堅」。珣珣「珣珣、耳にかざるたま。漢書に「珣珣在耳、首飾猶存」。珣珣「珣珣、名言佳句などを稱していふ語。楊萬里「銀鈞珣珣千萬章」」。

【珣】シユ、シユ。章俱切。虞。珣の玉の狀をなすもの。事物の美稱に用ふる。珣玉「霍山之珠玉焉」。珣珠「雷山之珠玉焉」。珣珠母「收珠母」。珣米「米圓圓白、樓桑箇箇青」。珣貝「蘭玉好芳堅」。珣珣「珣珣、耳にかざるたま。漢書に「珣珣在耳、首飾猶存」。珣珣「珣珣、名言佳句などを稱していふ語。楊萬里「銀鈞珣珣千萬章」」。

【珠殿】うるはしき殿。王融「璧門涼月舉、珠殿秋風廻」。

【珠旗】たまをかざるはた。沈約「轉八風之珠旗」。

【珠閣】うるはしきたかどの。李白「玉樓珠閣不獨樓」。

【珠箔】たまのすたれ。元稹「大道垂珠箔、當爐踏銀茵」。

【珠履】たまを飾につけたるくつ。史記に「春申君、客三千餘人、其上客皆躡珠履、以見趙使、趙使大慙」。

【珠履】たま。莊子に「日月爲連璧、星辰爲珠履」。

【珠樓】うるはしきたかどの。李白「春風開紫殿、天樂下珠樓」。

【珠雷】たまの如き花のつぼみ。王冕「朔風吹寒珠雷裂」。

【珠簾】たまのかんざし。張衡「珠簾擬分編髮亂」。

【珠簾】たまのすたれ。鮑照「珠簾無隔露、羅帳不勝風」。

【珠環】たまを連ねたる一種の頭飾。劉禹錫「何人不願解珠環」。

【珠纒】たまのかんむりのひも。黃庭堅「曉日成霞張錦綺、青林多露纒珠纒」。

【珣】シユ、シユ。章俱切。虞。珣の玉の狀をなすもの。事物の美稱に用ふる。珣玉「霍山之珠玉焉」。珣珠「雷山之珠玉焉」。珣珠母「收珠母」。珣米「米圓圓白、樓桑箇箇青」。珣貝「蘭玉好芳堅」。珣珣「珣珣、耳にかざるたま。漢書に「珣珣在耳、首飾猶存」。珣珣「珣珣、名言佳句などを稱していふ語。楊萬里「銀鈞珣珣千萬章」」。

【珣】シユ、シユ。章俱切。虞。珣の玉の狀をなすもの。事物の美稱に用ふる。珣玉「霍山之珠玉焉」。珣珠「雷山之珠玉焉」。珣珠母「收珠母」。珣米「米圓圓白、樓桑箇箇青」。珣貝「蘭玉好芳堅」。珣珣「珣珣、耳にかざるたま。漢書に「珣珣在耳、首飾猶存」。珣珣「珣珣、名言佳句などを稱していふ語。楊萬里「銀鈞珣珣千萬章」」。

【珣】シユ、シユ。章俱切。虞。珣の玉の狀をなすもの。事物の美稱に用ふる。珣玉「霍山之珠玉焉」。珣珠「雷山之珠玉焉」。珣珠母「收珠母」。珣米「米圓圓白、樓桑箇箇青」。珣貝「蘭玉好芳堅」。珣珣「珣珣、耳にかざるたま。漢書に「珣珣在耳、首飾猶存」。珣珣「珣珣、名言佳句などを稱していふ語。楊萬里「銀鈞珣珣千萬章」」。

【珣】シユ、シユ。章俱切。虞。珣の玉の狀をなすもの。事物の美稱に用ふる。珣玉「霍山之珠玉焉」。珣珠「雷山之珠玉焉」。珣珠母「收珠母」。珣米「米圓圓白、樓桑箇箇青」。珣貝「蘭玉好芳堅」。珣珣「珣珣、耳にかざるたま。漢書に「珣珣在耳、首飾猶存」。珣珣「珣珣、名言佳句などを稱していふ語。楊萬里「銀鈞珣珣千萬章」」。

十 畫

瑠 ル。瑠の俗字。
瑠 ル。ユ。餘封切。冬。
瑠 ル。蘇果切。智。
瑠 ル。くづ、こな、連結すること、又、くさり、ちひさし、こまかし、帝王の門をわかし、みめよし、ひくし、いやし、しらす、(録)。
瑠 ル。さいなり。わづかなり。
瑠 ル。前に同じ。元種、詞旨、瑠、冒、(演)。
瑠 ル。小さくして勢なし。詩經に「瑠兮尾兮、流離之子」
瑠 ル。こまかくして近し。杜預「若使、發語卑謹、則情趣瑠近、立言高簡、則旨意遠大」
瑠 ル。わづらはしく細かなり。蘇軾「初移一寸根、瑠細如插秧」
瑠 ル。くだげちる。周書、劉瑠雪賦に「衆邈兮瑠散」
瑠 ル。細小なる貌。易經に「旅瑠瑠斯、其所取笑」
瑠 ル。余招切。蕭。
瑠 ル。美しき玉、美稱にいふ字。
瑠 ル。他人のてがみの敬稱。字文融「飛文瑠札降、賜酒玉杯傳」

瑠 ル。たま。江淹「帶瑠玉而爭光、握隋珠而比麗」
瑠 ル。穆天子の四玉母に會したるところ。穆天子傳に「賜四玉母於瑠池之上」
瑠 ル。(植)菊の異名。
瑠 ル。たまのほやし。范成大「千巖觀下碧瑠林」
瑠 ル。うろはしきすわりばし。李白「瑠席乘涼設」
瑠 ル。荀子に「瑠玉瑠珠」
瑠 ル。たまにて飾れるふえ。戴叔倫「更弄瑠瑠」
瑠 ル。たまにて飾れること。劉長卿「終日愧瑠瑠」
瑠 ル。うつくしきうてな。劉義恭「丹墀設金屏、瑠瑠陳玉林」
瑠 ル。たまのうてな。離騷に「望瑠瑠之儂、兮、見有娥之佚女」
瑠 ル。たまにて飾れる車。江淹「金輿之所出入、瑠瑠之所周通」
瑠 ル。うるはしきうまれつき。梁簡文帝「玉璫光瑠瑠、金細婉瑠瑠」
瑠 ル。たまのさかづき。張翥「玉顏醉瑠瑠」
瑠 ル。うつくしきかほ。劉義恭「瑠瑠映長川、善服照通澗」
瑠 ル。たまのかんざし。范成大「大掌高荷半、散陰、玉英危綴瑠瑠簪」

瑠 ル。うろはしきたま。白居易「折來比玉色、一種如瑠瑠」
瑠 ル。瑠瑠樹。人品のけたかきないふ。晉書に「王戎謂王衍曰、神姿高徹、如瑠瑠樹」
瑠 ル。タイ、テ。都回切。灰。
瑠 ル。玉に次ぐ美しき石。
瑠 ル。エイ、ヤウ。永兵切。庚。
瑠 ル。烏定切。徑。烏週切。週。
瑠 ル。玉に似たるうつくしき石。あざやか、あきらか、しばむ(調)つや、ひかり、(まどふ)惑)。
瑠 ル。メ、母下切。馬。
瑠 ル。めなう(瑠瑠)。
瑠 ル。リウ、ル。力求切。尤。
瑠 ル。冕の飾に垂れ下ぐる玉。はたあし、美しき玉(瑠に同じ)。
瑠 ル。クワイ、ケ。公回切。灰。
瑠 ル。キ。居胃切。未。
瑠 ル。たま、一説に、美しき石。めづらし(たまなす(一種の花))。
瑠 ル。晉靈公、家其瑠瑠。西京雜記に「瑠瑠、めづらし。淮南子に「聖人無屈奇之服、無瑠瑠之行」

瑠 ル。ふしきなり。張翥「峰崖削、窮造花之瑠瑠」
瑠 ル。すぐれてあり。唐書、李商隱傳に「商隱爲文、瑠瑠奇古」
瑠 ル。すぐれたる、ことば。張九齡「瑠瑠大節、磊落瑠瑠」
瑠 ル。すぐれたるたま。高啓「上有秀句、如瑠瑠」
瑠 ル。他句切。嚴。チン。陟。テン。待年切。先。
瑠 ル。みみたま、みみかさ(耳玉)、文采の相雜はるにいふ、一種の玉。みみたま(いしす)。(讀)。
瑠 ル。かんむりのひも。李商隱「冕絃瑠統、山巖瑠瑠」
瑠 ル。シヤウ、サウ。七羊切。陽。
瑠 ル。楚耕切。庚。サウ。千剛切。陽。
瑠 ル。玉の聲。樂器の聲。物の聲。玉の色。
瑠 ル。玉の聲の形容。又、樂器の聲の形容。詩經に「八鸞瑠瑠」
瑠 ル。サ。七何切。歌。
瑠 ル。みがけるたま、瑠に同じ、みがけるたま、物の鮮かにして盛んなること、巧に笑ふ貌。
瑠 ル。あざやかなる貌。詩經に「瑠兮瑠兮、其之展也」

瑠 ル。たまの白く美しき貌。宋史に「瑠瑠瑠瑠、篆金煌煌」
瑠 ル。カク、コク。古岳切。覺。
瑠 ル。古岳切。屋。
瑠 ル。玉の名。玉の對の稱。
瑠 ル。サウ、セウ。側絞切。巧。
瑠 ル。玉の名。くるまがり。

十一 畫

瑠 ル。シヨ、ソ。傷魚切。魚。
瑠 ル。ト、ツ。通都切。虞。
瑠 ル。美しき玉。
瑠 ル。古渾切。元。
瑠 ル。玉を佩びて行く貌。佩玉の聲。
瑠 ル。玉の相擊ちて發する聲の形容。風窗小韻に「劍瑠瑠、文瑠、左右に」
瑠 ル。玉を佩びて行く貌。玉篇に「瑠瑠、佩玉行貌」又、高道素「駐衣於禮畢、然後退、瑠瑠」
瑠 ル。佩玉の聲の形容。
瑠 ル。キン、コン。居隈切。叻。
瑠 ル。美しき玉、赤き玉。
瑠 ル。美しきたま。左傳に「瑠瑠、國君含瑠」
瑠 ル。エイ。煙突切。齊。
瑠 ル。くろきたま。

瑠 ル。うろはしきたま。白居易「折來比玉色、一種如瑠瑠」
瑠 ル。瑠瑠樹。人品のけたかきないふ。晉書に「王戎謂王衍曰、神姿高徹、如瑠瑠樹」
瑠 ル。タイ、テ。都回切。灰。
瑠 ル。玉に次ぐ美しき石。
瑠 ル。エイ、ヤウ。永兵切。庚。
瑠 ル。烏定切。徑。烏週切。週。
瑠 ル。玉に似たるうつくしき石。あざやか、あきらか、しばむ(調)つや、ひかり、(まどふ)惑)。
瑠 ル。メ、母下切。馬。
瑠 ル。めなう(瑠瑠)。
瑠 ル。リウ、ル。力求切。尤。
瑠 ル。冕の飾に垂れ下ぐる玉。はたあし、美しき玉(瑠に同じ)。
瑠 ル。クワイ、ケ。公回切。灰。
瑠 ル。キ。居胃切。未。
瑠 ル。たま、一説に、美しき石。めづらし(たまなす(一種の花))。
瑠 ル。晉靈公、家其瑠瑠。西京雜記に「瑠瑠、めづらし。淮南子に「聖人無屈奇之服、無瑠瑠之行」

六 畫

【甜】 テン、デン。徒兼切。鹽。あまし(甘)、うまし(美)。應聲曰、柔甚甜甘。【甜瓜】 (植)まくらぼり。本草に「甜瓜、一名甘瓜、一名果瓜」。【甜硝】 硝くすりの名。本草に「取せ硝英硝、再以蘿蔔煎鍊、去鹹味、即爲甜硝」。

八 畫

【倅】 エン。以冉切。珠。あまし(甘)。【魁】 カン、ゴン。胡甘切。覃。猛き貌。白虎。【嘗】 シヤウ、嘗に同じ。【魁】 タン、ドン。徒含切。覃。感切。感。①キン、ゴン。許金切。②室字の深澤なる貌。③火の盛んなる貌。かんなり。④火の盛んなる貌。

生 部

部 首

【生】 セイ、シヤウ。所京切。庚。所景切。梗。所敬切。敬。

【起】 うまる、うむ(産)。おこる、おこす。【造】 やしなふ。いづ、いだす。なる、なす。【造】 はゆ、そだつ。いく、いやす。いかなからふ。いのち(命)。【みち】 (義理)。【すざはひ】 (産業)。【暇なきこと】 いきもの(人物)。【なま】 (不熱)。【いけ】 (禽慮)。【こと】 (事)。【無意味の助字】 そだつ(育)。【うむ、うまる】。【生民】 たみ。人民。詩經に「厥初生民、時維姜嫄」。【生】 物の類りに生ずる貌。易經に「生生之謂易」。【生存】 いきながら。陸游「老大斷非金谷友、生存惟冀酒泉封」。【生肉】 なまのにく。魏書に「襄平北市生肉、長圍各數尺」。【生母】 生みたるはは。南史、謝瞻傳に「瞻弟瞻年數歲、所生母郭氏疾」。【生長】 たんじやうび(誕辰)。【生長】 おひそだつ。漢書に「猶生長于齊、不能不齊言也」。【生來】 うまれつき、又、うまれてこのかた。【生育】 おひそだつ。詩經に「載震載夙、載生載育」。【生前】 生きてなるうち。杜甫「生前相遇且銜杯」。【生活】 生命を保つ。いきながら。又、よわたり。文子に「自天子以下至」。【生計】 于庶人、各自生活。【生計】 くらし。すぎはひ。劉滄「自憐生計事悠悠、浩渺滄浪一釣舟」。【生茂】 おひしげる。易林に「甘露海暑、萬物生茂」。【生面】 新しき方面。杜甫「凌煙功臣少顏色、將軍下筆開生面」。【生客】 はじめての客。志林に「子由作棲賢堂記、僕爲書之、且欲與廬山一結緣、它日入山不爲生客也」。【生芻】 刈りて未だ枯れざるまゝのもの。詩經に「生芻一束、其人如玉」。【生祠】 生存の中に神として祭る爲に立つる祠。漢書、于定國傳に「父子公爲郡決曹、決獄平、郡中爲之生立祠、曰子公祠」。【生紙】 すきたるままの紙。唐代に、裏あるときに用ゐしもの。陸游「閒吟寄友惟生紙」。【生徒】 うまれこ(孩兒)。李密「生徒六月、慈父見背」。後漢書に「修學校、教生徒」。【生息】 いきながら。李觀「行行求飲食、欲以助生息」。【生殺】 いかすと、ころすと。蘇軾「書生只肯坐帷幄、談笑端端弄生殺」。【生氣】 いきいきしたるいきはひ。禮

【生得】 記に「生氣方盛、陽氣發泄」。【生得】 信乃令軍中、毋殺廣武君、有能生得者、購千金。【生訣】 いさわかれ。後漢書に「援與妻子生訣、無悔吝之心」。【生産】 なりはひ。史記に「其媵媵平之不視家生産」。【生捕】 いけどる。穆天子傳に「生捕虎、而獻之」。【生涯】 一生のあひだ。莊子に「吾生也有涯、而知也無涯」。【生動】 東觀餘論に「以氣韻生動爲先、經營位置爲下」。【生路】 たすかるべきみち。陶潛「江革齊人也、漢章帝時、避賊負母而逃、賊賢之不害、而告其生路」。【生硬】 固陋にして人情に通ぜず。又、詩文の熟練を缺けるにもいふ。白居易「吏民生硬都如鹿」。【生途】 そだつ。朱熹「動植各生途、德容自清溫」。【生絹】 れらざるきぬ。畫史に「古畫至唐初皆生絹」。【生意】 いきいきしたる心。晉書に「大司馬府中有老槐樹、顧之良久而歎曰、此樹婆娑、無復生意」。【生業】 くらすぎのわざ。晉書、陶潛

【生業】 傳に「不營生業、家務悉委之奴僕」。【生聚】 民をそだて財をあつむ。左傳に「伍子胥曰、越十年生聚、而十年教訓」。【生齒】 ことし生れたる子。周禮に「自生齒以上、皆登于版、司寇獻于王」。【生憎】 なりあしく。又、おもしろ。意外に。盧照鄰「生憎帳額繡孤鸞」。【生魄】 陰曆十六日。書經、傳に「周公攝政七年三月、始生魄、月十六日疏に「無光之處、名魄也」。【生擒】 前に同じ。魏志に「生禽黃巾大帥吳覇、而降其屬」。禽は擒に同じ。【生還】 いきてかへる。劉長卿「天南一萬里、誰料得生還」。【生鮮】 なま。又、いきいきしてあり。搜神記に「鱸魚皆三尺餘、生鮮可愛」。【生畫】 れらざるきぬ。圖繪寶鑑に「畫梅於生絹扇上、燈月下宛然影也」。【生蟲】 いきもの。竹書紀年に「鳳凰不食生蟲」。【生類】 前に同じ。東京賦に「常畏生類之珍也」。【生鐵】 きたへざる鐵。詩經、疏に「畫者色如生鐵」。【生靈】 たみ。人民。孔穎達「雖無爲而自發、乃有益于生靈」。【生苦薩】 優美なる婦人。書言故事に「人妻有三可畏、年少之時視之如生苦薩、安有二人不畏生苦薩耶」。【生死肉骨】 死ないかし骨に肉す。人の大恩を受くるにいふ。左傳に「蘧子馮曰、吾見申叔夫子所謂生死而肉骨也」。【生存競争】 Struggle for existence. 生存上より起るすべての競争。【生老病死】 (佛)四つのくるしみ、即ち、生ると老ゆると病むと死ぬると。法華經科註に「生老病死四苦也」。【生存活剝】 他人の詩文を丸めすみするをいふ。唐詩記事に「李義府常賦詩曰、鏡月爲歌扇、裁雲作舞衣、有豪強尉張懷慶、好偷竊名士文章、爲詩曰、生情鏡月爲歌扇、出性裁雲作舞衣、時語曰、活剝張昌齡、生存剝正」。【生知安行】 生れながらにして知り、安んじて行ふ。中庸に「或生而知之、或學而知之、或困而知之、及其知之、一也、或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及其成功一也」。【生者必滅】 (佛)いのちある者は必ずほろぶ。【生寄死歸】 人のこの世に在るは恰も寄留の如く、死亡は歸るが如きなり。淮南子に「生、寄也、死、歸也、何

【生】 足ニ以滑^レ和^ル。生意活動^ル。晝などの眞に逼るをいふ。圖繪寶鑑に「吳道子、晝人物、有八面、生意活動」。

五 畫

【牲】 シン。所臻切。眞。むらがる、おほし、さかんなり。

六 畫

【産】 サン、セン。所簡切。潛。所憂切。諫。うむ。うまる。うまれたるものなり。はひ、すぎはひ。もとで(資財)。樂器の名。つくりにいたす。産に同じ。うみそだつ(生育)。

【産出】 ツクリダス。つくりにだす。【産地】 ツクリノチ。生れたる土地。又、その物のでる地。【産卵】 タマゴをうむ。後趙錄に「時淳風白羌婦産一卵、大如孟、剖之有蟲如巨蟻、二足立行」。

【産物】 ソノチノニシズルモノ。よわたり(のわざ)、又、生産の業。史記に「周人之俗、治産業、力工商、逐什二以爲務」。【産賦】 ツクリノツキ。産物を出づる高。土之所産賦也。

七 畫

【甬】 ズキ。僮佳切。支。俗に、蕤に作る。

【甥】 サウ、シヤウ。所更切。庚。外孫(女の嫁きて生める子)。及び舅の子、又、妻の兄弟及び姉妹の夫の稱。

【甞】 シヤウ。甥に同じ。

【甞】 シヤウ。甥に同じ。

用 部

部 首

【用】 ヨウ、ユ。余頌切。宋。もちある。おこ。なふ。つか。あけもちある(登庸)。はたらき。いさを、しるし。つかひみち。たから(財貨)。つひえ(支費)。もとで(資力)。もりの(器實)。そなへ(防備)。だうぐ(器具)。もって。

【用才】 ツキ。才智ある人を用ゐる。陶潛「巖巖朝市、帝者慎用才」。【用心】 ツキ。心をつかふ。きをつく。莊子「用心若鏡」。

二 畫

【甫】 フ、ホ。方矩切。麋。はじめ(始)。おほし、もろもろ(衆)。おほいなり(大)。われ(我)。男子の美稱。圃に通ず。

【甬】 ヨウ、ユ。余龍切。腫。めをいだす、はななく(華)。わく(湧)。樓閣の覆道。宮禁のかよひみち。量の名、今の斛。つれ(常)。鐘の柄。くた(甬)に同じ。

【甬道】 ツクリノチノミチ。牆垣を築きて街巷の如くせる道。史記に「築甬道、而輪之粟」。

七 畫

【甯】 テイ、ニヤウ。乃定切。徑。ねがひ(願)。むしろ(寧)に同じ。邑の名。

田 部

部 首

【田】 テン、デン。待年切。先。電練切。霞。た、はた。一井の地。おほつづみ(太鼓)。かり(獵)。民を養ふこと。倒れんとするに、いふ。鼓の聲。蓮の葉の貌。たつくる。

【田犬】 カリに用ゐるいぬ。周禮、疏に「犬有三種、一者田犬、二者吠犬、三者食犬」。【田夫】 あなかももの。禮記に「黃衣黃冠而祭、息田夫也」。【田田】 荷葉の水に浮べる貌。江南曲に「蓮葉何田田」。鼓の聲の形容。禮記に「殷殷田田、如墜牆然」。【田宅】 たといへ。史記に「王翦請美田宅園池甚衆」。【田里】 むらさと。孟子に「制其田里、教之樹畜」。【田車】 カりに用ゐるくるま。詩經に

「田車既好、四牡孔阜」。【田舍】 あなやか。又、あなか。杜甫「田舍清江曲」。【田青】 水田に生ずる蟲。水族加恩簿に「惟爾田青、微蟲淺味」。【田油】 たのみぞ。左傳に「子駟爲田油」。疏に「爲田造溝、故稱田油」。【田家】 あなかや。孟浩然「故人具雞黍、邀我至田家」。【田桑】 田作と、がひと。吳志に「田桑已至、不可後時」。【田租】 田地にわりあつる租税。後漢書に「昔牛入田租芻蕘」。【田野】 あなか。聞見後錄に「漢高祖一竹皮冠、起田野」。【田植】 耕作して穀物をうう。水經、注に「能治田植」。【田開】 たのなか。後漢書に「每歲農時、載酒肴於田開」。【田稅】 田地にわりあつる租税。宋史、李防傳に「均定田稅」。【田畯】 動農を掌る官。詩經に「饒彼南畝、田畯至喜」。【田園】 たはた。陶潛「歸去來兮、田園將蕪、胡不歸」。【田鼠】 (動)もぐらもち。元史に「馬湖田鼠食穀殆盡、總管祠而祝之、鼠悉赴水死」。【田螺】 (動)たにし。本草に「田螺生」

水田中、及湖濱岸側、形圓大如梨橘、小者如桃李、人煮食之」。【田疇】 穀をううる田と麻をううる畑と。禮記に「殺草可、以養田疇、可、以美土疆」。田地のあぜ。淮南子に「正封疆、修田疇」。【田獵】 かり。禮記に「田獵禽獸者、野處教道之」。【田廬】 あなかや。左思「功成不受爵、長揖歸田廬」。【田父功】 勞せずして功を收むるに喩ふ。戰國策に「韓子虛者天下之疾犬也、東郭邊者海内之狡兔也、韓子虛逐東郭邊、環山者三、騰山者五、兎極於前、犬廢於後、犬死俱罷、各死其處、田父見之、無勞倦之苦、而擅其功」。【由】 イウ、ユ。以周切。尤。よる。經歷す、ふかたどる(式)。ちなむ(因縁)。したがふ(從)。ただす(正)。もちある(用)。おこなふ(行)。なほ(尙)。自得の貌。喜悅の貌。わけ、よし、ちなみ、いはれ。より。たすく(輔)。木の枝を生ずること。國の名。縣に通ず。【由由】 自得の貌。又、喜悅の貌。孟子に「故由由焉、與之偕而不失焉」。【由來】 ぐわんらい。楊炯「趙氏連城壁、由來天下傳」。事のゆゑよし。左傳に「吾知其所以由來矣」。

【由胡】ヨコ。〔植〕しろよもぎ。爾雅に「葉由胡」
 【由行】ヨコ。行く貌。馬融「由行識道」注に「由行、行貌」
 【由緒】ヨコ。傳へ來れる理由。いはれ。洛陽伽藍記に「遂問寺由緒」
 【由縁】ヨコ。ちなみ。ゆかり。陶潛「憶賢思南歸、路遐無由縁」
 【甲】カフ、ケフ。古卯切。洽。まざる(長)、なる(習)②はじむはじま(始)③よろひ(鏡)④よろひを著けたる兵士⑤つめ(爪)⑥から(介)⑦ほさき(銚)⑧ころも(衣)⑨かひわり、さや⑩趙宋の時の義勇兵の二小區。

【甲子】カフ。十干と十二支と。漢書、律歷志に「歷數三統、天以甲子、地以甲辰、人以甲申」
 【甲兵】カフ。よろひ武者。(兵甲)。國語に「齊國寡甲兵」
 【甲夜】カフ。午後八時。漢儀に「漏夜盡、鼓鳴則起、鐘鳴則息、衛士甲乙徵相傳、甲夜畢傳乙夜」
 【甲科】カフ。第一等。漢書、蕭望之傳に「望之以射策甲科爲郎」
 【甲冑】カフ。よろひとかぶとと。書經に「維甲冑起戎」
 【甲革】カフ。かばのよろひ。周禮に「王弓

弧弓、以授射甲革、慎質者」と
 【甲産】カフ。龜の類。孫綽「麟乘萬殊、甲産無方」
 【甲第】カフ。かみやしき。西京賦に「北闕甲第、當道直啓」
 【甲鏡】カフ。よろひ。唐書に「受黃質甲鏡、弓矢於衛尉」
 【申】カフ。失人切。眞。申、試刃切。震。まざる(十二支の一)②み(身)③せのび(欠伸)④のぶ(舒)⑤ゆるやかなる貌⑥かさね(重)⑦いたす(致)⑧のぶ(伸)⑨ひく(引)。

【申説】カフ。訓戒をのぶ。書經に「伊尹申説于王、曰、嗚呼天惟無親、克敬惟親」
 【申殿】カフ。まうしあぐ。宋書、孝武帝紀に「百辟庶尹、下民賤隷、中未聞朝聽者皆聽、躬自申殿小大以聞」
 【申證】カフ。証、獄不誼翻。以後漢書に「罪無申證、獄不誼翻」
 【申申如】カフ。ゆるやかなる貌。論語に「子之燕居、申申如也、天天知也」
 【申韓學】カフ。申不害、韓非子が主張せし學、即ち、刑名の學。後漢書、酷吏傳に「陽球性嚴厲、好申韓之學」

〔田部〕畷

【男】ケン、ナン。那含切。覃。をの(丈夫)②をの(壯)③五爵の第五位。ケン、姑法切。先。

【甸】ケン、デン。堂練切。殿。亭年切。先。ショウ、縄證切。徑。以證切。徑。セイ、ジャウ、時正切。敬。王都を去る、五百里以内の地、又、千里より五百里の間の稱、郊外、六十四井區域、ゆく(擬)をさむ(治)郊野を掌ること、田野の産物、かる(狩)地の名、一種の車。
 【甸服】ケン。王都を距る五百里以内の地の稱。書經に「五百里甸服」

【畷】ヘイ、ヒヤウ。普丁切。青。すみやか(畷)①ひく(曳)②をとし(任俠)③財を軽んずるもの。テイ、チャウ。他項切。週。湯丁切。青。マウ、ジャウ。丈梗切。梗。テン。他典切。鈺。まち、あぞ(畔埒)④かざり(區域)⑤地を除いて埒となすこと、町畷は、鹿の跡、あしあと、一説に、舍旁の隙地、あきち。あぞ。傳じて、心にへたであ

【畷治】ケン。みぞ。書經に「治畷、距川」
 【畷疆】ケン。田のあぞ。吳師道「頰聞播種初、行者避畷疆」
 【畷畷中】ケン。畷は田開のみぞ、畷は田のうれ。傳じて、あなかないふ。孟子に「舜發於畷畷之中」

三 畫

【画】クワイ、エ。胡卦切。卦。畫に同じ、ムガク。
 【畷】シュン、ジュン。松倫切。眞。朱閏切。眞。畷の古文字。
 所(みぞ)〔溝〕。ケン、姑法切。鈺。畷に同じ。支。昔に同じ。瀆、離に同じ。ウ、モウ。武登切。蒸。ウ、マウ、莫那切。陽。無習なる人民(畷野)。

【畷】ヒ。卑の俗字。カウ。呼朗切。養。しほつち。ヒ。必至切。眞。あたふ(與)①たまふ(賜)。

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

四 畫

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

〔田部〕畷

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

三 畫

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

四 畫

【畷】カウ。古郎切。陽。各朗切。養。居溪切。漾。

事をおこなふこと。②地の名。③地の名。④陽に通じ用ゐる。⑤武勇ある貌。
 〔番〕 ばん(番人)。つがひ(蝶番)。
 〔番戌〕 ばん 番にあたりてまじる。宋史に「平居知有訓厲而番戌之勢」。
 〔番番〕 ばん 武勇ある貌。書經に「番番其士、旅力既愨、我尙有之」。

畫

①クワク、ギヤク。胡麥切。陌。
 ②クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ③クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ④クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ⑤クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ⑥クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ⑦クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ⑧クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ⑨クワイ、エ。胡卦切。卦。
 ⑩クワイ、エ。胡卦切。卦。

〔畫舫〕 ぶがふ ぶがきかざりたるふね。蘇軾「全家依畫舫、極目亂紅粧」。
 〔畫舸〕 ぶがふ 前と同じ。五代史に「龍舟畫舸、照耀江上」。
 〔畫筆〕 ぶがふ ぶをかくふで。元好問「畫筆尙餘詩典刑」。
 〔畫策〕 ぶがふ ぶがかりことを立つ。解嘲に「留侯畫策、陳平出奇」。
 〔畫餅〕 ぶがふ ぶがきたる餅は食ふべからず、以て用ゐるべからざるに喩ふ。魏志に「選舉莫取有名者、如畫地作餅、不可啖也」。

〔畫脂鑿冰〕 ぶがふ 勞して功なきに喩ふ。鹽鐵論に「內無其實、而外學其文、若畫脂鑿冰、費日損工」。
 〔畫蛇添足〕 ぶがふ 蛇には足なし、然るに足を添ふが如く、無用の事に喩ふ。戰國策に「楚有祠者、賜舍人卮酒、相謂曰、請畫地爲蛇、先成者飲、一人蛇先成、引酒且言、吾能爲之足、未成、人之蛇成、奪其卮、曰、蛇固無足、子安能爲之足、遂飲其酒、爲蛇足者、終亡其酒」。

〔畫眉〕 ぶがふ 一の字を引きたる如くととのふ。史記に「蕭何爲法、類若畫眉」。
 〔畫工〕 ぶがふ ぶがき。西京雜記に「諸宮人皆善畫工、獨王嬪不肯、遂不得見」。
 〔畫手〕 ぶがふ 前と同じ。蘇軾詩人與畫手、蘭菊芳「春秋」。

〔畫虎類狗〕 ぶがふ 豪傑の風に倣うて、反つて輕薄に陥るに喩ふ。後漢書に「馬援戒兄子嚴、嚴曰、龍伯高敦厚周慎、吾願效之、杜季高豪俠好義、吾不願效之、汝曹效之、效伯高不得、猶爲誦教之士、所謂刻鵠不成、尚類鶩者也、效季高不得、陷爲天下輕薄子、所謂畫虎不成、反類狗者也」。

〔畫龍點睛〕 ぶがふ 龍を畫きて、最後にその眼を入る。事を完全になし遂ぐるに喩ふ。水滸志に「張僧繇于金陵安樂寺、畫四龍于壁、不點睛、每曰、點之即飛去、人以爲誕、因點其一、須臾雷電破壁、一龍乘雲上天」。

〔畚〕 ぶがふ 畚の字。
 〔晦〕 ぶがふ 畚の本字。
 〔畷〕 ぶがふ 祖峻切。震。
 〔畷〕 たつくるひと(農夫) 農神

異

①羊吏切。眞。
 ②羊吏切。眞。
 ③羊吏切。眞。
 ④羊吏切。眞。
 ⑤羊吏切。眞。
 ⑥羊吏切。眞。
 ⑦羊吏切。眞。
 ⑧羊吏切。眞。
 ⑨羊吏切。眞。
 ⑩羊吏切。眞。

〔異〕 ①羊吏切。眞。
 〔異〕 ②羊吏切。眞。
 〔異〕 ③羊吏切。眞。
 〔異〕 ④羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑤羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑥羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑦羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑧羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑨羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑩羊吏切。眞。

〔異〕 ①羊吏切。眞。
 〔異〕 ②羊吏切。眞。
 〔異〕 ③羊吏切。眞。
 〔異〕 ④羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑤羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑥羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑦羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑧羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑨羊吏切。眞。
 〔異〕 ⑩羊吏切。眞。

【異類】 たぐひなことにす。又、たぐひのことなるもの。國語に「異、德則異類」又、列子に「虎之與人異類」

【異體】 みちをことにす。陸機「質文殊、塗、百行異轍」

【異議】 かばりたる議論。後漢書に「每有四方異議、輒召入問籌策」

【異體】 かたちを、ことにす。晉書に「異體同勢、奮筆輕舉、離而不絶」

【異域鬼】 他國にて死にたるもの。李陵「相去萬里、人絶路殊、生爲別生之人、死爲異域之鬼」

【異口同音】 衆人の説の一致するに、いふ。普賢經に「異口同音、教於行者清淨六根」

【異中有同】 ことなる中にも、同じき點あり。黃庭堅書法論に「同中有異、異中有同」

【異世同調】 時は異なれども、調は異なることなし。謝靈運「唯謂古今疎、異世可同調」

【異路同歸】 路は異なれども、目的とする所は同じ。淮南子に「五帝三王、殊事而同指、異路而同歸」

【雷】 リウ、ル。力求切。尤。

【雷】 とどまる。とど、ほる。滯。まつ。待。ひさし。久。おくる。遅。ゆる。や。徐。うかがふ。な。さ。治。か

【異類】 たぐひなことにす。又、たぐひのことなるもの。國語に「異、德則異類」又、列子に「虎之與人異類」

【異體】 みちをことにす。陸機「質文殊、塗、百行異轍」

【異議】 かばりたる議論。後漢書に「每有四方異議、輒召入問籌策」

【異體】 かたちを、ことにす。晉書に「異體同勢、奮筆輕舉、離而不絶」

【異域鬼】 他國にて死にたるもの。李陵「相去萬里、人絶路殊、生爲別生之人、死爲異域之鬼」

【異口同音】 衆人の説の一致するに、いふ。普賢經に「異口同音、教於行者清淨六根」

【異中有同】 ことなる中にも、同じき點あり。黃庭堅書法論に「同中有異、異中有同」

【異世同調】 時は異なれども、調は異なることなし。謝靈運「唯謂古今疎、異世可同調」

【異路同歸】 路は異なれども、目的とする所は同じ。淮南子に「五帝三王、殊事而同指、異路而同歸」

【雷】 リウ、ル。力求切。尤。

【雷】 とどまる。とど、ほる。滯。まつ。待。ひさし。久。おくる。遅。ゆる。や。徐。うかがふ。な。さ。治。か

【雷】 たし(牢)黄色の絲。まつ。すばる(昴星の別名)。

【雷心】 こころを、とどむ。きを、つく。庾信「雷心職事、愛玩圖書」

【雷守】 守る。す。あ。げ。ん。史記、呂后紀に「呂后年長、常雷守希見上」

【雷別】 旅立つ人が雷まれる人に別を告ぐる、こと。

【雷軍】 軍隊を、とどむ。史記に「魏王使人止晉鄙、雷軍壁鄴」

【雷連】 雷つづき。淮南子に「愚夫蠢婦、皆有雷連之心」

【雷意】 こころを、とどむ。きを、つく。(注意)。漢書に「游文於六經之中、雷意於仁義之際」

【雷滯】 とどまり、とど、ほる。魏志、管輅傳に「尋聲投響、音無雷滯」

【雷藏】 とどめを、さむ。唐書に「生平所得奉祿、以分宗親、無雷藏」

【雷緊】 とどめて、つなぐ。宋史に「有久被雷緊者」

【映】 カフ、ケフ。俟夾切。洽。つづく。

【八畫】

【畫】 クワク、ヤク。畫の俗字。クワイ、エ。畫の俗字。タウ、都郎切。陽。丁浪切。漾。

【當今】 いま。現時。孟子に「當今之世、舍我其誰也」

【當刑】 已に定まれる法。書經に「其或不恭、邦有當刑」

【當年】 ことし。又、そのとし。そのころ。漢書に「不能通其學、當年不能究其禮」

【當事】 直接にその事にあたる。

【當路】 その道の要地にあたる。漢書に「禹治水、山陵當路者毀之」

【當面】 まのあたり。蔡邕「筆疏、可當面」

【當朝】 當代の朝廷。舊唐書に「盛引、當朝詞學之臣、數賜遊宴」

【當罪】 つみにあつ。(抵罪)。管子に「審刑當罪」

【當歸】 「植」やまざり。本草に「當歸、一名乾歸」注に「當歸苗有二種、細葉者名、寬頭、當歸大葉者」

【當墟】 酒店を守るをいふ。梁簡文帝「當墟設、夜酒、宿客解、金鞍」

【當】 たふ(任)むかふ(對)かなふ(適)あふ(會)とのゐす(直)あたひす(值)おほふ(蔽)ならぶ(偶)つかさどる(主)おほふ(蔽)つく(即)うく(承)然るべきなり(當)あつ、あたらしむ(當)まさるべし(聲)の形容(當)そ、(底)あたると(當)ひきあて。

【當今】 いま。現時。孟子に「當今之世、舍我其誰也」

【當刑】 已に定まれる法。書經に「其或不恭、邦有當刑」

【當年】 ことし。又、そのとし。そのころ。漢書に「不能通其學、當年不能究其禮」

【當事】 直接にその事にあたる。

【當路】 その道の要地にあたる。漢書に「禹治水、山陵當路者毀之」

【當面】 まのあたり。蔡邕「筆疏、可當面」

【當朝】 當代の朝廷。舊唐書に「盛引、當朝詞學之臣、數賜遊宴」

【當罪】 つみにあつ。(抵罪)。管子に「審刑當罪」

【當歸】 「植」やまざり。本草に「當歸、一名乾歸」注に「當歸苗有二種、細葉者名、寬頭、當歸大葉者」

【當墟】 酒店を守るをいふ。梁簡文帝「當墟設、夜酒、宿客解、金鞍」

【當】 たふ(任)むかふ(對)かなふ(適)あふ(會)とのゐす(直)あたひす(值)おほふ(蔽)ならぶ(偶)つかさどる(主)おほふ(蔽)つく(即)うく(承)然るべきなり(當)あつ、あたらしむ(當)まさるべし(聲)の形容(當)そ、(底)あたると(當)ひきあて。

【當今】 いま。現時。孟子に「當今之世、舍我其誰也」

【當刑】 已に定まれる法。書經に「其或不恭、邦有當刑」

【當年】 ことし。又、そのとし。そのころ。漢書に「不能通其學、當年不能究其禮」

【當事】 直接にその事にあたる。

【當路】 その道の要地にあたる。漢書に「禹治水、山陵當路者毀之」

【當面】 まのあたり。蔡邕「筆疏、可當面」

【當朝】 當代の朝廷。舊唐書に「盛引、當朝詞學之臣、數賜遊宴」

【當罪】 つみにあつ。(抵罪)。管子に「審刑當罪」

【當歸】 「植」やまざり。本草に「當歸、一名乾歸」注に「當歸苗有二種、細葉者名、寬頭、當歸大葉者」

【當墟】 酒店を守るをいふ。梁簡文帝「當墟設、夜酒、宿客解、金鞍」

【發育】^{ハツ} そだつ。中庸に「洋洋乎發育萬物」
 【發芽】^{ハツ} めぐむ。めざす。宋元「雷雨還驚蟄、潛藏重發芽」
 【發送】^{ハツ} おくり出す。おくる。史記、蘇秦傳に「諸侯各發使送之其衆、擬於王者」
 【發笑】^{ハツ} わらふ。文天祥「使我發笑愁顏開」
 【發展】^{ハツ} のびひろがる。さかえゆく。
 【發動】^{ハツ} おこりうごく。莊子に「人固有戸居而龍見、雷聲而淵默、發動如天地者乎」
 【發掘】^{ハツ} あばきほる。漢書に「發掘傅太后、丁太后冢」
 【發揚】^{ハツ} おこりあがる。羅隱「抱影何卑細、乘時忽發揚」
 【發疾】^{ハツ} 疾き貌。詩經に「南山烈烈、飄風發發」
 【發軔】^{ハツ} 車を出す。たびだちするにいふ。魏書に「六軍發軔、丁丑戎服、執鞭御馬而出」
 【發揮】^{ハツ} ふさがれるをひらく。易經に「六爻發揮、旁通情也」
 【發意】^{ハツ} 心をおこす。淨住子に「卓然發意、忍苦受辱」
 【發達】^{ハツ} のびたつ。成長す。進歩す。蕭穎士「揆逸禮也、蓋取諸句萌發達」
 【發處】^{ハツ} としのはじめ。楚辭に「開春

發處兮、白日出之悠悠」
 【發端】^{ハツ} はじめ。はじめり。宋史に「發端爲難」
 【發憤】^{ハツ} 心をふるひおこす。論語に「發憤忘食」
 【發憤忘食】^{ハツ} はなしたす。開天遺事に「方啓、口發談、香氣噴于席上」
 【發號】^{ハツ} 號令を出だす。易經に「發號施令、罔有不藏」
 【發號】^{ハツ} 天子の御出立。
 【發輝】^{ハツ} ひかりをばなつ。潘岳「散環發輝」
 【發燭】^{ハツ} 火を點するに用ゐるつけぎ。輟耕錄に「杭人削松木爲小切、其薄如紙、鎔硫黃塗木片頂、分許、名曰發燭、又曰燄兒」
 【發聲】^{ハツ} 音をいだす。又、いだすこと。孟子に「徵於色、發於聲、而喻」
 【發見】^{ハツ} 目明かならざる者、ひらかれて見ゆる所あるをいふ。長楊賦に「今日發矇、曠然已昭矣」
 【發蘊】^{ハツ} 懷抱せる才學をのべあらはす。文中子に「智哉太初、善發其蘊」
 【發覺】^{ハツ} あらはれて人にさとらる。史記、高祖本紀に「事發覺、夷三族」
 【發蒙振落】^{ハツ} 物の上に覆へる巾を發くを發蒙といひ、落葉を振ふを振落といふ。事の甚だ容易なるに喩ふ。漢書、汲黯傳に「至說公孫弘等、如發

【發蒙振落耳】^{ハツ} 發蒙は繩を解き放つなり、指示は指し示す、犬の繩を解き放ちて獲物にけしかくるをいふ。史記に「獵追殺獸免者狗也、而發蒙指指示獸處者人也」

白部

【白】^{ハク} ハク、ビヤク。旁陌切。陌。しろむ。しろきよし。潔。あきらかなる、(明)まうす(申)さかづき(杯爵)しろがね(銀)の官祿なきこと。未だ熱練せざること。しろごめ(稻)一年の間、とし一種の酒、裝束を著けざることを、茅にて屋を覆ふこと。
 【白日】^{ハク} てりがややく太陽。まひる。孔融「譏邪害公正、浮雲蔽白日」
 【白刃】^{ハク} しらは。めきみ。管子に「陷白刃、受矢石」
 【白文】^{ハク} 漢文に句讀訓點を施さざるもの。無點。
 【白田】^{ハク} ばたけ。李白「蠶老客未歸、白田已種絲」
 【白石】^{ハク} しろきいし。詩經に「楊之水、白石鑿鑿」
 【白石鑿鑿】^{ハク} (植)藥草の名。

【白圭】^{ハク} 滑かなる玉。詩經に「白圭之玷、尚可磨也、斯言之玷、不可爲也」
 【白汗】^{ハク} しろき玉の如きあせ。淮南子に「擊石之尊、則白汗交流」
 【白米】^{ハク} しらげたるこめ。楊維禎「白米紅鹽十萬家」
 【白衣】^{ハク} 無位無官の人。史記に「公孫弘以春秋白衣、爲天子三公」
 【白衣】^{ハク} 漢書、雙勝傳に「聞之白衣、或君莫言」
 【白衣】^{ハク} 孟秋之月、天子衣白衣、服白玉。我國にて「ビヤクエ」と訓ず。
 【白雨】^{ハク} にはかあめ。(驟雨)。蘇軾「白雨跳珠亂入船」
 【白波】^{ハク} めすびとをいふ。後漢書に「靈帝中平元年張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在四河白波谷、時俗號白波賊」
 【白芷】^{ハク} (植)しろひぐさ。(澤芬)。楚辭に「綠蘋齊葉兮白芷生」
 【白金】^{ハク} しろがね。銀。唐書に「隋末行五銖白錢」
 【白金】^{ハク} Platinum. ぶらちな。銀白色の金屬、熱に遇ふも容易にとけず、ただ王水に溶解するのみ。増嶋・皿・針金等に製す。
 【白狀】^{ハク} 自らつみをまうし出づ。漢書、丙吉傳に「遼歸府、見吉白狀」
 【白油】^{ハク} 水なき田のぞみ。方太古「平田白油流、新雨、絕壁青楓掛斷雲」
 【白眉】^{ハク} 衆中にてひとりすぐれたる

【白首】^{ハク} 白髪あたま。韓愈「樽酒相逢十載後、我爲壯夫君白首」
 【白虹】^{ハク} 白色のじ。禮記に「君子比德於玉、氣如白虹天也」
 【白洲】^{ハク} しろき沙にてなれるす。蘇軾「孰云風土惡、白洲生綠珠」
 【白屋】^{ハク} 茅ぶきの家。あばらや。韓詩外傳に「窮巷白屋之士、周公所先見者四十九人」
 【白骨】^{ハク} しろきほね。後漢書に「昔文王不忍露白骨、武王不以天下易一人之命」
 【白豹】^{ハク} (動)しろきへう。詩經、疏に「毛白而文黑、謂之白豹」
 【白氣】^{ハク} しろき氣體。漢書に「白氣起東方、賊人將興之表也」
 【白麻】^{ハク} 詔書をいふ。唐の中書、黃白二麻を用いて、綸命を爲る、その後翰林專ら白麻を掌り、中書獨り黃麻を用ゐる。白居易「白麻紙上書德音、京畿盡放今年稅」
 【白徒】^{ハク} 訓練なき軍隊。管子に「以教卒練士、擊歐衆白徒」
 【白晝】^{ハク} ひるひなか。許棠「白晝常多

事、無妨到曉吟」
 【白眼】^{ハク} ちらむ。王維「科頭箕踞長松下、白眼看他世上人」
 【白魚】^{ハク} (動)しみ。衣服・書物等に生する蟲。
 【白梅】^{ハク} (植)しろき花のうめ。又、青梅の實を鹽につけ日にさらしたるもの。本草に「青者鹽淹、曝乾爲白梅」
 【白雪】^{ハク} しらゆき。孟子に「白雪之白、猶白玉之白與」
 【白蒼】^{ハク} 皮膚の色のしろきこと。漢書、霍光傳に「光爲人沈靜詳審、長財七尺三寸、白蒼疏眉、美鬚鬢」
 【白毫】^{ハク} 佛のひたひにありて光を發したりといふ毛。多く佛像の額に圓形左旋のものを作りて表す。法華經に「世尊於靈山會上、爲諸大衆、說二十八品、放眉間白毫相、光照三千大千世界」
 【白鳥】^{ハク} (動)しろきとり。又、さぎ。詩經に「白鳥嚶嚶」
 【白鳥嚶嚶】^{ハク} 蚊の異名。杜甫「江湖多白鳥」
 【白散】^{ハク} 屠蘇を囊に包まず、そのま酒にひたして用ゐるもの。
 【白黑】^{ハク} 善きものと悪しきものとの喩ふ。漢書に「所貶退稱道、白黑分明」
 【白雲】^{ハク} しらくも。莊子に「乘彼白雲、至於帝鄉」
 【白津】^{ハク} (動)白魚の異名。古今註に

〔白魚子好翠〕泳水上者、名曰白萍。〔白雁〕〔動〕しろきがん。晉書に「北方有白雁、似雁而小色白、秋深則來」。〔白貂〕〔動〕しろきてん。五代史附錄に「臨訣脫白貂裘、以衣高祖」。〔白著〕〔動〕いちぢるし。漢書、馮奉世傳に「威功白著、爲世使表」。〔白著〕の外に横取す。唐書に「稅外横取、謂之白著」。〔白蛾〕〔動〕しろきてふ。漢書に「建昭元年秋八月、有白蛾、羣飛蔽日」。〔白眞〕〔動〕しろきかざり。易經に「白眞无咎、上得志也」。〔白暈〕〔動〕しろきかき。暈は日月の周旁をとりまける雲氣なり。晉書に「白暈貫二月北」。〔白楊〕〔植〕はこやなぎ。許渾「水煙青草濕、山月白楊愁」。〔白榆〕〔動〕しろきの名。古樂府に「天上何所有、歷歷種白榆」。〔白銀〕〔動〕しろがね。史記に「皆以黃金白銀爲宮闕」。〔白質〕〔動〕しろき色のまと。陸機「又有紫貝、其白質如玉」。〔白髭〕〔動〕しろきうげ。元好問「清鏡平明見白髭」。〔白蓮〕〔動〕しろき蓮の花。白居易「水花披白萼」。〔白璧〕〔動〕しろき色のたま。史記に「賜黃金百鎰、白璧一雙」。〔白藏〕〔動〕あき。梁昭明太子「白藏蕭殺、天高野清」。〔白癡〕〔動〕極めておろかなり。左傳、注に「不慧蓋世、所謂白癡」。〔白顛〕〔動〕馬の額に白毛あるもの。詩經に「有車鄰鄰、有馬白顛」。〔白露〕〔動〕しらつゆ。蘇軾「白露橫江、水光接天」。〔白馬寺〕〔動〕支那に於ける最初の寺、後漢の明帝の時、蔡愔、大月氏の僧攝摩騰、竺法蘭の二僧を伴うて歸り、洛陽に之を建立せり。謝靈運、慧遠法師等の一團に名づけし稱、蓮社高賢傳に「謝靈運一見遠公、肅然心伏、乃即寺築臺、講經、淨土之業、因號白蓮社」。〔白頭翁〕〔動〕頭髪の白きおきな。劉延芝「寄言全盛紅顏子、應憐半死白頭翁」。〔白頭眞人〕〔動〕錢の異名。漢書に「王莽以錢文有金刀、故改爲貨泉、或以貨泉字、爲白水眞人」。〔白面書生〕〔動〕年わかしくして事にな

れざるもの。南史、沈慶之傳に「今陛下令欲伐國而與白面書生謀之、事何由濟」。〔白衣送酒〕〔動〕陶淵明九月九日に酒なし、時に白衣の人至るを見る、乃ちその友王弘が酒を送り來りしなり。杜審言「降霜青女月、送酒白衣人」。〔白虹貫日〕〔動〕精誠天に感應するに似ふ。史記に「昔者荆軻、燕丹之義、白虹貫日」。〔白魚入舟〕〔動〕武王の故事にて、敵國我に歸服する兆に似ふ。史記に「武王渡河、中流、白魚躍入王舟中、武王俯取以祭」。〔白駒過隙〕〔動〕人の一生涯の短きに喩ふ。莊子に「人生天地之間、若白駒之過隙」。〔白頭如新〕〔動〕幼少より白頭に至るまで、交際すれども、意志投合せずば、新知と異ならず。漢書に「白頭如新、傾蓋如故」。〔白龍魚服〕〔動〕貴人の微行に似ふ。說苑に「吳王欲從民飲、伍子胥諫曰、不可、昔白龍下清冷之淵、化爲魚、漁者豫且射中其目、白龍上訴天帝、天帝曰、當是時、若安置而形、白龍對曰、我下清冷之淵、化爲魚、天帝曰、魚固人所射也、若是豫且何罪、夫白龍天帝貴畜也、豫且宋國賤臣也、白龍不化、豫且不射、今棄萬乘之位、而從布衣之士飲酒、臣恐其有豫且之患矣、王乃止」。〔白壁微瑕〕〔動〕白きたまに少しのきず。大體美にして僅かの缺點あるに喩ふ。史記に「黃金有疵、白玉有瑕」。〔白玉樓中之人〕〔動〕文人の死ぬるに喩ふ。書言故事に「唐李賀將死、有緋衣駕赤虬召賀、緋衣曰、帝成白玉樓、立召爲記、天上差樂、不苦也」。

〔百〕〔動〕ハク、ヒヤク。博陌切。陌。百も十を十倍したる數の稱。もたひ。おほし(衆多)の(動)。も。妻子眷族をいふ。晉書、周顛傳に「司空導率羣從、詣闕請罪、值顛將入、導呼曰、伯仁以百口累卿、顛直入不顧」。〔百工〕〔動〕もろもろのつかさ。書經に「允釐百工」。もろもろの工人。周禮に「國有六職、百工與居一焉」。〔百方〕〔動〕いろいろのてだて。書苑に「百方譬說、不能得」。おほくの國。道德指歸論に「百方仰朝」。〔百木〕〔動〕おほくの樹木。後漢書に「温

緩之氣、養生百木」。〔百代〕〔動〕のちのちのよ。晉書、元仲傳に「聲施無窮、而典重百代」。〔百合〕〔動〕〔植〕ゆり。陸游「更乞兩叢香百合、老翁七十尙童心」。〔百舌〕〔動〕〔動〕もす。杜甫「赤葉楓林百舌鳴、黃泥野岸天雞舞」。〔百芳〕〔動〕おほくのほひ花。(羣芳)。埤雅に「蜂採取百芳、釀蜜」。〔百珍〕〔動〕おほくのあしき氣。文天祥「百珍自辟易」。〔百非〕〔動〕おほくのあしきこと。孔子家語に「夫子見一人善忘、其百非」。〔百官〕〔動〕ものつかさ。おほくのやく。書經に「惟悅命總百官」。〔百度〕〔動〕もろもろののり。陸機「天人之分既定、百度之缺粗修」。〔百姓〕〔動〕人民。詩經に「羣黎百姓、徧爲爾德」。〔百拜〕〔動〕幾回となく拜す。禮記に「先王因爲酒禮、一獻之禮賓主百拜、終日飲酒、而不得醉焉」。〔百計〕〔動〕おほくのほかりこと。陸游「百計不能逃白髮」。〔百草〕〔動〕もろもろのくさ。史記に「孟春冰泮發蟄、百草奮興」。〔百神〕〔動〕おほくのかみ。詩經に「懷柔百神、及河喬嶽」。〔百祥〕〔動〕おほくのさいはひ。書經に

〔作〕善降之百祥」。〔百揆〕〔動〕庶政を揆り度る官。書經に「納于百揆、百揆時敘」。〔百辟〕〔動〕諸侯。詩經に「百辟斯刑」。〔百雉〕〔動〕城の大きにいふ、一雉の墻といへば長さ三丈、高さ一丈の墻なり。史記、仲尼世家に「臣無藏甲、大夫毋百雉之城」。〔百祿〕〔動〕おほくのためもの。詩經に「敷政優優、百祿是道」。〔百需〕〔動〕もろもろのものとめ。宋史に「公家百需、皆仰清井鹽利」。〔百僚〕〔動〕おほくのつかさ。書經に「百僚師師」。〔百說〕〔動〕もろもろの説。江淹「既遊思兮百說、亦窮精兮萬里」。〔百端〕〔動〕いろいろのいとぐち。史記に「博開藝能之路、悉延百端之學」。〔百穀〕〔動〕おほくの穀物。易經に「日月麗乎天、百穀草木麗乎土」。〔百戲〕〔動〕おほくの遊戯。劉晏「樓前百戲競爭新、唯有長竿妙入神」。〔百藥〕〔動〕もろもろのくすり。淮南子に「四水者、帝之神泉、以和百藥、以潤萬物」。〔百變〕〔動〕いろいろにかはる。左氏兵略に「用兵之法、一步百變」。〔百聽〕〔動〕おほくさへづる。賈至「百轉流鶯啼建章」。

十一畫

【駮】①サ、セ。側加切。麻。
②ソ、ス。采古切。麩。
③ハ、ナ。のなきび(鼻麩)もがき、か
さほろしひび(麩)もがき、か
さほろしひび(麩)もがき、か
【駮】ヒツ、ヒツ。畢吉切。賈。
①ひざかけ。賈きたるなめし
がは、かは。

十三畫

【鼓】①テン。知葦切。銃。②セン。之
葦切。銃。③セウ。之遙切。蕭。④
タン。黨早切。早。⑤タツ。タチ。他達切。
⑥⑦⑧⑨⑩皮寬し⑪はなる⑫
肉のうすかは⑬面の膚の病⑭ふくる。

十五畫

【鼓】トク、ドク。徒谷切。屋。
①なめらか②ゆぶくろ(靴)。
【熾】ハツ、ホチ。勿發切。月。
かはたび、したうづ(足衣)。

皿部

【皿】①ベ、イ、ミヤウ。眉永切。梗。
②バウ、ミヤウ。母梗切。梗。
③はら(盤孟の類)。

三畫

【盞】カン。居寒切。寒。
①はち(盞)②わん(盞)。
【盞】ウ。雲俱切。虞。
①はち、わん②ちからぐさ(草
の名)③田獵の陣の名。
【孟蘭盆】梵語 [Muhamban]。七月十
五日に行ふ法會。孟蘭は倒懸、盆は食
器、この日百味の飲食を父母及び七世
の父母に具へ、十方の佛僧に施し、倒懸
の苦をも救はんとする意。釋氏要覽に
「行孝順者、亦應奉孟蘭盆」。

四畫

【盃】ハイ。杯の俗字。
【盃】ホン、ホン。歩奔切。元。
①盃に通ず。
【盃】①はとぎ、はち(盃)②盃を煮るうづ
は③ひたす(淹)④くりだす⑤あふる。
【盃】カフ、ゴフ、カイ。盃に同じ。
【盃】エイ、ヤウ。餘輕切。庚。
①みつ(盃)②あふる(盃)③あ
まる(餘)④盃に通ず。
【盃】①十五夜のつき。魏志に「三五
盈月、清輝燭夜」。
【盃】①みつるとむなしきと。阮籍

五畫

【益】①エキ、ヤク。伊昔切。陌。
②ます(増)③ますます④すす
む(進)⑤ゆたか(饒)⑥くばふ(加)⑦お
ほし(多)⑧みちあふる(盈滿)⑨たすく
(助)⑩ためになること⑪利徳あること
⑫易の卦の名。
【益友】益友。交りて益ある友。論語に「益
者三友、損者三友」。
【益母】益母(植)ははぐり。爾雅に「今莞
藎也、又名益母」。
【益智】益智。ちみをます。葉適「書多前
益、智、文古後垂」名。龍眼の異名。本
草に「龍眼生南海山谷、一名益智」。本
【益壽藥】益壽藥。之を飲めばながいきす
るといふくすり。史記に「汝何求、曰、願

六畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

七畫

【盃】①アウ。於溪切。漾。
②はとぎ、はち(盃)③盛んに見
はる、あふる④さかんなり(盛)。
【盃】①瓦のこぼち。淮南子に「狗彘
不擇孟盃而食」。

八畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②カフ、ゴフ。胡閑切。合。
【盃】①カイ。丘蓋切。泰。
②カイ。丘蓋切。泰。③おほふ
(覆)④あふる⑤なんぞ⑥ざる(疑問辭)
⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓
【盃】①カレ、これ同じ。南史に「俱爲
盃各、則未之敢許」。
【盃】①朋輩のよりあつまるにいい。
易經に「朋盃簪」注に「盃合也簪疾也」疏
に「朋合聚而疾來也」。
【盃】①アウ。於溪切。漾。

皿部

【盃】①ヘン、ベン。符炎切。鹽。
②ハン、ホン。孚梵切。陷。
さかづき(櫛)。
【盃】ワン。郎管切。早。
①わん、はち、さら(皿)。
【盃】カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②カフ、ゴフ。胡閑切。合。
【盃】①カイ。丘蓋切。泰。
②カイ。丘蓋切。泰。③おほふ
(覆)④あふる⑤なんぞ⑥ざる(疑問辭)
⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓

九畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

十畫

【盃】①アウ。於溪切。漾。
②はとぎ、はち(盃)③盛んに見
はる、あふる④さかんなり(盛)。
【盃】①瓦のこぼち。淮南子に「狗彘
不擇孟盃而食」。

十一畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

十二畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

羊部

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

十三畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

十四畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

十五畫

【盃】①カフ、ゴフ。胡閑切。合。
②アン、オン。烏含切。覃。
【盃】①さら②さらのふた③すぼむ。
④ワ、ヲ。憂俱切。虞。⑤汪胡切。
虞。⑥チ。衣慮切。魚。
うづまきながる。

至意難違、覽其盛指、俾朕慨然。」
 【盛秋】シキ あきのもな。漢書注に「盛秋馬肥、故令折衝禦難也。」
 【盛怒】シキ さかんにいかる。國語に「寡君不能事疆場之司、使君盛怒、以暴露于敵邑之野。」
 【盛時】シキ さかんなるとき。曹植「盛時不可再。」
 【盛夏】シキ なつのもな。漢書、五行志に「盛夏日長暑。」
 【盛氣】シキ さかんなるいきほひ。又、氣をさかんにす。史記に「左師觸龍言、願見太后、太后盛氣、而晉之入。」
 【盛勢】シキ 前に同じ。魏志に「及其未合逆擊之、折其盛勢、以安衆心。」
 【盛會】シキ さかんなるよりあひ。周白琦「良辰盛會如雲從。」
 【盛業】シキ さかんなるわざ。杜甫「盛業今如此、傳經過絶倫。」
 【盛飾】シキ さかんなるよほひ。史記に「盛飾入朝者、不以私汚義。」
 【盛德】シキ さかんなる徳。史記に「良買深藏若虚、君子盛德容貌若愚。」
 【盛樂】シキ さかんなる音楽。禮記に「帝用盛樂。」
 【盛儀】シキ さかんなり。論衡に「德惠盛儀、故瑞繁夥也。」
 【盛勳】シキ さかんなるいさを。阮籍「元功盛勳、光光如彼。」

【盛麗】シキ さかんにうるはし。史記に「猶云、出見紛華盛麗、而説也。」
 【盛寵】シキ さかんなる寵愛。漢書、谷永傳に「長堪重任、久享盛寵。」
 【盛饌】シキ りっぱなる酒食。論語に「有盛饌、必變色而作。」
 【盛者必衰】シキ さかんなるものは容易し、故に必衰の理あるなり。仁王經に「盛者必衰、實者必虚。」
 【盛年不重来】シキ 年わかき時代は再び来ることなし。陶潜「盛年不重来、一日難再晨、及時當勸勵、歲月不待人。」又、林寛「白日莫閑過、青春不可再来。」
 【盜】タウ タウ、ドウ。杜到切。竊。
 【盜汗】タウ れあせ。
 【盜臣】タウ れあせ。大學に「與其有聚斂之臣、寧有盜臣。」
 【盜沒】タウ れあせ。北史、李崇傳に「詐增功級、盜沒軍資。」
 【盜竿】タウ おほむすびと。竿唱ふれば衆樂和すといふより、大盜唱ふれば小盜和する義にとる。老子に「服文采、帶利劍、厭飲食、而貨資有餘、是謂盜竿。」
 【盜泉】タウ いづみの名。後漢書、郡國志に「徐州有盜泉。」
 【盜名】タウ 俗に、盜に作るは非なり。

志に「徐州有盜泉。」
 不義の義に喩ふ。説苑に「水名盜泉、孔子不飲、醜其名也。」
 【盜掠】タウ れあせ。唐書、史憲誠傳に「戎人怒、因與盜掠。」
 【盜鈔】タウ 前に同じ。唐書に「回鶻人驍強、善騎射、喜盜鈔。」
 【盜賊】タウ れあせ。韓駒「初聞盜賊奔他境、漸見衣冠集此州。」
 【盜竊】タウ れあせ。漢書に「上有好利之臣、則下有盜竊之民。」
 【盜驪】タウ 千里の馬の名。穆天子傳に「右服盜驪。」
 【盜名字】タウ 僭號して王と稱するをいふ。蘇軾「天下大亂、豪傑蜂起、方是時、以數州之地、盜名字者、不可勝數。」

八 畫

【蓋】カイ カフ、ゴフ。蓋に同じ。
 【蓋】カイ ロク。盧谷切。屋。
 【蓋】カイ つく。煇。か。る。潤。した。たる。濼。す。は。櫃。匣。の小なるもの。
 【蓋】カイ サン、セン。阻限切。潛。
 【蓋】カイ さかづき、又、小さきさかづき。
 【蓋】カイ ベイ、ミヤウ。眉兵切。庚。
 【蓋】カイ パウ、ミヤウ。莫更切。敬。

●あきらか(明)ちかふ、ちかひ(誓)
 【盟友】メイ したしきとも。
 【盟主】メイ 同盟のかしら。左傳に「晉爲盟主。」
 【盟兄】メイ したしき友の敬稱。
 【盟府】メイ ちかひのかきつけを入れおく。章「名書史籍、勳在盟府。」
 【盟約】メイ ちかふ。ちかひ。史記に「夫楚兵雖強、天下負之、以不義之名、以其背盟約、而殺義帝也。」
 【盟契】メイ ちかひ。京房「盟契無羌、邦必昌矣。」
 【盟載】メイ ちかひの文書。周禮に「司盟掌盟載之法。」
 【盟誓】メイ ちかふ。ちかひ。約誓。左傳に「戮力同心、申之以盟誓、重之以婚姻。」
 【盟壇】メイ ちかひのには。梁州記に「今門外盟壇猶存。」

【盡】ジン 在忍切。軫。
 【盡】ジン つく。竭。みな、ことごとく(悉)とどまる(止)きまむ(極)つくす(みな)昔(い)づれも(つ)まびらか(詳)つくし見る貌(ま)かす。
 【盡力】ジン ちかひをつくす。杜甫「塵中老盡力、歲晚病傷心。」

於武成「取二三策而已矣」
 【監】カン カン、ケン。古銜切。咸。
 【監】カン 古陷切。陷。
 【監】カン ①すぶ(領)②みる③しらぶ④しめす(観)⑤かめ(攝)⑥てらしみる、かんがみる⑦めつけ、しらぶる者⑧をさ(宰領)⑨かみ(鑑)⑩明かなる貌。
 【監本】カン 國司監にて刻せし書物。陸深「胡致堂論明宗曰、命國子監、以木本一印書、又以監本爲正。」
 【監史】カン 天子のさかまりを監督するもの。詩經に「既立之監、或佐之史。」
 【監奴】カン しもべがしら。漢書、霍光傳に「初光受幸監奴馮子都。」
 【監門】カン もんげん。周禮、注に「監門門徒。」
 【監修】カン 書物の著述を監督す。又、その官。合璧事類に「唐太宗以宰相監修國史。」
 【監國】カン 國事を監督す。國語に「君行太子居以監國也。」
 【監視】カン めをつけみる。(督視)。漢書に「四方羣后、我監我視。」
 【監寐】カン さめてもいねても。後漢書に「監寐寤歎、疾如疾首。」注に「監寐言、難寢而不寐也。」
 【監督】カン とりしめる。とりしまり。後漢書、荀彧傳に「上設監督之重、下建副貳之任。」

【盥】 しろぶ。王逸「入則與王圖議政事、決定嫌疑、出則監察羣下、應對諸侯」
【盥】 みまもる。詩經、疏に「教令工匠、監護其事」
【盥】 しらべみる。詩經に「監觀四方、求民之莫」

十 畫

【盤】 ハン、パン。蒲官切。寒。
① さら、はち。たのしむ(般に通ず、樂)② 大いなる石、いはば(磐)③ わたかまる(蟠に通ず)④ たらひ(盥)⑤ めぐる(旋)
【盤古】 おほむかし。宋元通鑑に「字羅曰、且問、盤古至今、幾帝幾王」
【盤石】 おほいなるいば。成公綏「坐盤石」注に「盤、大石也」
【盤回】 まはりめぐる。韓愈「流水盤回山百轉」
【盤坂】 うれうれとまがりたるさか。孟浩然「平田出郭少、盤坂入雲長」
【盤盂】 飲食物を入るるに用ゐる器。抱朴子に「視泰山、如彈丸、見滄海、如盤盂」書物の名。黃帝の史、孔甲の作。漢書に「孔甲盤盂二十六篇」
【盤好】 わたかまりまがる。應璩「奉繁響、而增制分、心愴結而盤好」
【盤桓】 進みがたき貌。たちもとほ

る。易經に「初九盤桓、利居貞」
【盤旋】 めぐりめぐる。北史に「將相卿士、悉皆盤旋」
【盤渦】 めぐりめぐま。江賦に「盤渦谷轉、凌濤山頽」
【盤遊】 たのしみあそぶ。歸田賦に「極盤遊之至樂、雖日夕而忘劬」
【盤踞】 わたかまる。杜甫「落落盤踞難得地、冥冥孤高多烈風」
【盤錯】 入り組みたること。劉禹錫「紛挐盤錯、一瞬而剖」
【盤根錯節】 わたかまりたる根と入り組みたる木節と。世事の艱難に喩ふ。後漢書、虞翻傳に「謝爲朝歌長、笑曰、不遇盤根錯節、何以別利器乎」

十一 畫

【盥】 古緩切。早。
【盥洗】 てあらふ。牛僧孺「盥洗朝服、立子祥階之東」
【盥浴】 てあらひゆあみす。後漢書、劉寬傳に「簡略嗜酒、不好盥浴」
【盥漱】 てあらひくちそそぐ。禮記に「難初鳴咸盥漱」
【盥】 パ、マ。眉波切。歌。さかづき(杯)。

十二 畫

【盥】 ケウ、ゲウ。渠嬌切。蕭。はち、わん(盂)。
【盥】 タウ、ダウ。徒浪切。漾。徒期切。養。タウ、吐耶切。陽。おす(推)あらふ(盥)うごかす、うごく(動)はなつ、はなる、ほしいままなり(放)大いなる貌あらふ

【盥】 手にて船をうごかす。論語に「弄善射、栗盥舟」
【盥汰】 あらひうるほす。鮑照「浩澤盥汰、臣亦與焉」
【盥汰】 たひらげほろぼす。漢書に「盥汰古法」
【盥】 おほはた。隋書に「第一團、每隊給青牛盥」
【盥】 大いなる貌。河東賦に「廓盥盥其亡」
【盥】 水はげしくうちあふ。柳宗元「勢峻盥盥益暴」

十三 畫

【盥】 カイ。醜に同じ。
【盥】 コ、ク。果五切。夔。古暮切。遇。古胡切。虞。しほ(鹽)もろし(鹽)の出づる池、しほいけ(倉卒)する(噫)しほらく(姑)にはか(倉卒)せめつつかたむしほいけ。

十四 畫

【盥】 カウ、ケウ。吉巧切。巧。カウ、ゲウ。後教切。效。カウ、ゲウ。力竹切。屋。かきみたす、にこらすあたた

むるうつは(盥器)ちひさきかま(うつは(器)うつは)。

十五 畫

【盥】 ライ、レ。魯回切。灰。疊に同じ。もたひ(酒器)。レイ、ライ。力計切。霽。レツ、レチ。練結切。屑。もとの(戻)たがふ(違)あつかは、た(既)艾に似たる一種の草みどり色のくみいと。

部 首

【目】 ホク、モク。莫六切。屋。め、まな(空孔)みる(あきらかに(明)あな(空孔)すぢめ、きめ(脈理)めつき、めざし(要)をつく、みつむ、めくばせす(かなめ(要)となふ(稱)十、わけ(細別)かてう(條件)となへ、なま(稱)しな、からしな(品)首に通ず。孟子「目力」めのはたらくちから。

【目】 聖人既賜目力(盥)に「聖人既賜目力(盥)なみた。徐鶴「所以不欲讀史書、鼻淚目汁沾髭鬚」
【目成】 めくばせす。楚辭に「滿堂兮美人、忽獨與余兮目成」
【目見】 まのあたり見る。(面見)。説苑に「耳聞之不知目見之」
【目使】 めつかひす。唐書に「目使順令、自視王侯」
【目盲】 めくらになる。老子に「五色令人目盲、五音令人耳聾」
【目挑】 めにていどむ。史記に「目挑心招、出不遠千里」
【目眩】 めまき。列子に「目前之事、或存或廢、千不識」
【目食】 飲食物をかざりて目の爲に味を問はざるにふ。宋史に「飲食所以爲味也、適口斯善矣、世人取果餌、刻鏤之、朱絲之、以爲盤案之、豈非以目食乎」
【目指】 めくばせてさしづす。漢書、禹貢傳に「勢足目指氣使」
【目耕】 讀書するをいふ。世説に「王韶之家、貧而好學、嘗三日絶糧、執卷不輟、家人謂之、困窮如此、何不耕、王徐答曰、我常目耕耳」
【目送】 みおくる。漢書、周亞父傳に「上目送之」
【目笑】 目と目と見合せてあざけり

【相見】隋書に「高祖密令善相者來和、偏視諸子」

【相持】五にもち合ふ。史記、項羽本紀に「楚漢久相持未決、丁壯苦軍旅、老弱罷轉漕」

【相風】高十切。述征記に「長安南有靈臺、高十切、有相風銅鳥、遇風則動」

【相尅】五行の運行にて、木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅ちとす、之を相尅といふ。

【相國】百官の長。秦の時始めて之を置く。我國にては、太政大臣の異名に用ゐる。史記に「拜丞相何、爲相國」

【相術】人相をみるじゆつ。魏志、朱建平傳に「善相術於閭巷之間」

【相愛】相互にいつくしむ。禮記に「教民相愛、上下用禮禮之至也」

【相當】まさりおとりなし。漢書、注に「角抵者、兩兩相當、あてはまる。どにかなふ。」

【相憶】あひおもふ。駱賓王「別後能相憶、東陵有故侯」

【相應】あひあたる。西胡志餘に「雙玉桂相應、絕頂三更見日昇」

【相坐法】一家罪あれば、これと連合せる他のものもその罪を受くるをいふ。淮南子に「商鞅爲秦立相坐之法、而百姓怨焉」

【相見】隋書に「高祖密令善相者來和、偏視諸子」

【相持】五にもち合ふ。史記、項羽本紀に「楚漢久相持未決、丁壯苦軍旅、老弱罷轉漕」

【相風】高十切。述征記に「長安南有靈臺、高十切、有相風銅鳥、遇風則動」

【相尅】五行の運行にて、木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅ちとす、之を相尅といふ。

【相國】百官の長。秦の時始めて之を置く。我國にては、太政大臣の異名に用ゐる。史記に「拜丞相何、爲相國」

【相術】人相をみるじゆつ。魏志、朱建平傳に「善相術於閭巷之間」

【相愛】相互にいつくしむ。禮記に「教民相愛、上下用禮禮之至也」

【相當】まさりおとりなし。漢書、注に「角抵者、兩兩相當、あてはまる。どにかなふ。」

【相憶】あひおもふ。駱賓王「別後能相憶、東陵有故侯」

【相應】あひあたる。西胡志餘に「雙玉桂相應、絕頂三更見日昇」

【相坐法】一家罪あれば、これと連合せる他のものもその罪を受くるをいふ。淮南子に「商鞅爲秦立相坐之法、而百姓怨焉」

【相思字】互に相思ふ心を表せる文章。韓愈「桑榆倘可收、願寄相思字」

【眈】ひとみ(瞳) 目を怒らす貌。シユン、シユン。朱倫切。眞。之聞切。震。

【眈】めをとつ。鈍き目。ケツ、ケチ。古穴切。屑。

【眈】すすしきめ(消目) 目の患、めやみ。おどろき視る。かへりみて定まらざる貌。キョ、コン。許斤切。文。

【眈】よろこぶ(喜) 視れども明かならず、くらし。ケイ、ガイ。胡計切。霽。

【眈】ケイ、ガイ。吾禮切。霽。

【眈】にらむ、恨み視る。勤め苦しむ貌。【眈】勤め苦しむ貌。孟子に「使民眈眈然」

【眈】ハシ、フシ。符分切。文。

【眈】かへりみる、みる。めもとつつくしめつがひす、美人の目を動かす貌。あけがた、あかつき。【眈】ふりかへりみる。許由「我樂如何、蓋不眈眈」

【眈】セイ、サイ。七計切。霽。

【眈】みる、視る、察す。ながしめ

【盾】ウシユン。豎尹切。輪。キョ、キョ。敏切。輪。トシ、ドン。杜木切。阮。官の名。星の名。人の名。メイ、ミヤウ。眉兵切。庚。みる、ことあきらかなり。セイ、シヤウ。息非切。梗。

【省】みる、かへりみる。明かに察す。安否を問ふ。あきらかなり(明) まびらかなり(審) あきらかなり(明) あやまち(過) やくし(官廳) きんり(宮禁) よし(善) 告に通ず。【省改】かへりみて行をあらたむ。宋史に「君臣相戒、痛自省改」

【省私】閑居の時に於て氣をつく。論語に「退而省其私」

【省略】はぶく。蜀志に「戲雖性簡情省略、未嘗以言加人」

【省訟】訴訟をすくなくす。魏志に「息奸省訟、輯熙治道」

【省減】はぶきへらす。漢書に「蘇役省減、兵革不動、而民多貧」

【省察】既往のこゝとをとりしらす。唐書、積遂長傳に「惟陛下省察」

【眈】シ。視に同じ。

【眈】ウシユン。王分切。文。

【眈】コシ、コン。戸衰切。阮。

【眈】ほのか、くらし。疾く視る貌。

【眈】ハシ、フシ。符分切。文。

【眈】かへりみる、みる。めもとつつくしめつがひす、美人の目を動かす貌。あけがた、あかつき。【眈】ふりかへりみる。許由「我樂如何、蓋不眈眈」

【眈】セイ、サイ。七計切。霽。

【眈】みる、視る、察す。ながしめ

【眈】ハシ、フシ。符分切。文。

【眈】かへりみる、みる。めもとつつくしめつがひす、美人の目を動かす貌。あけがた、あかつき。【眈】ふりかへりみる。許由「我樂如何、蓋不眈眈」

【眈】セイ、サイ。七計切。霽。

【眈】みる、視る、察す。ながしめ

【眈】ハシ、フシ。符分切。文。

【眈】かへりみる、みる。めもとつつくしめつがひす、美人の目を動かす貌。あけがた、あかつき。【眈】ふりかへりみる。許由「我樂如何、蓋不眈眈」

【眈】セイ、サイ。七計切。霽。

【眈】みる、視る、察す。ながしめ

【眈】ハシ、フシ。符分切。文。

【眈】かへりみる、みる。めもとつつくしめつがひす、美人の目を動かす貌。あけがた、あかつき。【眈】ふりかへりみる。許由「我樂如何、蓋不眈眈」

【眈】セイ、サイ。七計切。霽。

【眈】みる、視る、察す。ながしめ

【矣哉】つよき指定の助辭。柳宗元「不勉己、而欲勉人、難矣哉」感歎の助辭。左傳に「尙矣哉、能歆神人」

三 畫

知

【知】チ。陟離切。支。
①しる。②わかまふ(辨別)。③おぼゆ(記憶)。④さとる。⑤みとむ(認識)。⑥たぐひ(匹偶)。⑦つかさどる(主)。⑧さとりしりあひ(いゆ)。⑨その人となりをしりて優待すること。⑩智に同じ。
【知十】きはめてさときになとふ。論語に「回也聞一而知十」
【知己】自分の心をよく知れる人。しりあひ。史記に「士爲知己者死、女爲悅己者容」
【知友】自分の心をよく知れるとも。潛夫論に「薄知友、而厚犬馬」
【知母】はばをさる。儀禮に「禽獸知母而不知父」藥草の名、めばじき。本草に「知母治諸蒸」
【知名】なをしる。禮記に「男女非有行媒、不相知名」はまれあり。晉書、武陵傳に「陵字元夏、早獲時譽、與二弟韶叔夏茂季夏、並總角知名」
【知足】たることをしる。魏志に「知進而不知退、知欲而不知足、故有困辱之累」

の理を辨へしる、こと。
【知覺】しりさとる。後漢書に「詐偽無由知覺」哲] Perception、事物を認識する作用。
【知天之天】天の萬物を生育する理を知りて、之を崇敬する義。史記、酈生傳に「臣聞、知天、天不可成、王事可成、不知天、天不可成、王者以民人爲天、而民人以食爲天」
【知足不辱】分を守るものは辱を受けず。老子に「知足不辱、知止不殆」
【知足者富】満足といふことを知る者は心ゆたかなり。老子に「勝人者有餘力、自勝者強、知足者富」
【知者不言】知識あるものは深く胸中に藏してみだりに言はず。老子に「知者不言、言者不知」
【知者樂水】知識ある人は事理に達するが故にものに凝滞せざるにいふ。論語に「知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」
【知雄守雌】つよくしてしかも柔弱の道を知り勝を求めざる義。老子に「知其雄、守其雌、爲天下竊」
【知子莫若父】親はもつともよくその子を知るをいふ。管子に「鮑叔曰、先人有言、知子莫若父、知臣莫若君」

【知言】道理に明かなることば。左傳に「秦伯以爲知言」
【知事】州、縣の長官。唐會要に「刺史有故乃闕、但令上佐依次知州事」
【知命】天命をさる。易經に「樂天知命、故不憂」五十歳をいふ。論語に「五十而知天命、六十而自強冠、七十而知命、老而知神不死」
【知音】音韻をさる。禮記に「知音而不不知樂者、衆庶是也」親友の義に用ふる。列子に「伯牙鼓琴、志在高山、鍾子期曰、峩峩然若泰山、志在流水、曰、洋洋然若江河、子期死、伯牙絕絃、以無知音者」
【知進】すすむことのみを知る。易經に「九之爲言也、知進而不知退」
【知得】得ることを知る。易經に「知得而不不知喪」知りあふ。陶潛「高陽許雅相知得、有若舊交」
【知遇】人となりをしりてよくあしらふ。南史、南康王曇首傳に「梁簡文之在東宮、深被知遇」
【知曉】しりさとる。韓愈、僕愚陋無所、知曉、然聖人之書、無所不讀」あかつきをさる。邵雍「日近先知曉」
【知舊】知りあひの人。魏志に「散之宗族知舊、家無餘財」
【知識】ちよと見識と。又、よく事物

【知遠而不知近】他人のことばは知るも己の事は知らざる意。淮南子に「袁弘知周之所存、而不知身所ニ以、知遠而不知近」事物の一端を知るもその他を知らざるにいふ。莊子に「子貢以漢陰丈人事、告孔子、孔子曰、彼識其一、不知其二」
【知生樂未、知生之苦】生きてあることの樂みを知りて生きて在ることの苦みをしらす。列子に「人皆知生之樂、未、知生之苦」
【知彼知己百戰不殆】能く彼我の情勢に通ずれば、百たび戦ふも危殆の境に陥ることなし。孫子に「知彼知己、百戰不殆、不知彼而知己、一勝一負、不知彼而知己、每戰必敗」

四 畫

侯

矧

【侯】コウ、ク。平溝切。尤。侯、矧に同じ。また(的)。
【矧】いはんや、まして(況)はぐき(斷に同じ)。
【五 畫】
ク、コ。俱雨切。巽。
●さしがね、かねざし●つね

矩

【矩】ク、コ。俱雨切。巽。
●さしがね、かねざし●つね

【矩】カド(廉)けた(方)おきて(法)のり(儀)大地の稱。
【矩形】ますがた。【數】幾何學上、各の角が直角を爲す四邊形の稱。
【矩則】守るべきのり。齊書に「吉凶奢驕、動違矩則」
【矩墨】さしがねとすみなはと。潛夫論に「造規繩矩墨、以教後人」
【矩繩】かねざしとすみなはと。轉じて、法則。大戴禮に「所謂賢人者、行中ニ矩繩」
【矧】テウ。都聊切。蕭。
●みじかし(短)犬の短き尾。

矧

短

【矧】サ、ザ。昨禾切。歌。みじかし(短)。
【短】タ。都管切。早。みじかし(短)たらざる、こと、あやまちある、こと、缺點(折)する、缺點を指す(わ)かじに(天折)。
【短人】せひくきひと。一寸法師。漢書、注に「朱儒、短人也」
【短刀】みじかきかな。あひくら。南史、侯景傳に「景命戰士、皆被短甲短刀」
【短才】つたなきはたらき。雍陶「每憶雲山養短才」
【短世】わかじに。晉書に「懷帝短世、

七 畫

矧

短

【矧】サ、ザ。昨禾切。歌。みじかし(短)。
【短】タ。都管切。早。みじかし(短)たらざる、こと、あやまちある、こと、缺點(折)する、缺點を指す(わ)かじに(天折)。
【短人】せひくきひと。一寸法師。漢書、注に「朱儒、短人也」
【短刀】みじかきかな。あひくら。南史、侯景傳に「景命戰士、皆被短甲短刀」
【短才】つたなきはたらき。雍陶「每憶雲山養短才」
【短世】わかじに。晉書に「懷帝短世、

越去王都
【短衣】たけみじかきころも。史記に「邴邴其服、服短衣」
【短兵】かたな。刀劍。史記に「長兵則弓矢、短兵則刀劍」
【短長】人の短所と長所と。左傳に「清濁大小、短長徐疾、以相濟也」
【短命】わかじに。論語に「有顏回者、好學、不幸短命死矣」
【短狐】(動)いきこむし。周禮、疏に「短狐盛暑所生、其狀如蠶」
【短計】あさはかなるばかりこと。柳宗元「千金奉短計、七首荊卿趙」
【短袂】みじかきたもと。論語に「褻裘長短右袂」
【短後】後のみじかき服。蘇軾「麻鞋短後隨獵夫」
【短窄】みじかくしてせまし。王建「素鈿重兩鬢、短窄古時衣」
【短淺】あさはかなり。韓愈「自知短淺無所補、從事久此穿朝衫」
【短笛】みじかきふえ。晉書に「歌聲清者、用短笛短律」
【短規】おとりたるばかりこと。謝靈運「研其淺思、罄其短規」
【短詠】みじかきうた。杜甫「長歌短詠還相酬」
【短短】みじかき貌。李白「白日何短短、百年苦易滿」

三 畫

【社】

シャ、セ。常者切。馬。くみあひ立春後の第五の戌の日及び立秋後の第五の戌の日の稱。江淮地方にて、母の稱。

【社日】立春後及び立秋後の第五の戌の日。春を春社といひ、秋を秋社といふ。歳華紀麗に「社日祀句龍擇元日」。

【社中】組合のうち。笑師道「分手漢上笑、擯眉社中緣」。

【社祠】國土を治むるかみ。漢書に「句龍、能平水土、死爲社祠」。

【社倉】飢饉を救ふ爲に設くる米ぐら。舊唐書に「武德元年九月置社倉」。

【社會】古は二十五家を一組とし、之を一社とせり。因つて相聚りて團體をなすを社會といふ。近思錄に「鄉民爲社會、爲立科條、旌別善惡、使有勸有恥」。

【社鼠】君側に居る奸人に喩ふ。晏子に「景公問曰、治國何患、晏子對曰、患社鼠、鼠之所以不可得殺者、以社故也、夫國亦有、人焉、人主左右是也、此亦國之社鼠也」。

は土穀に資りて以て人を養ふ、故に立てて之を祀るなり。孝經に「保其社稷、而和其民人」。

【社未屋】亡國の社には屋を設けて天光を受けしめず、故に國の未だ亡びざるをいふ。禮記に「天子大社、必受霜露風雨、以達天地之氣也、是故喪國之社屋之、不受天陽也」。

【社稷臣】國家の安危に任する家來。論語に「孔子曰、求、無乃爾是過與、夫爾與昔者先王以爲東蒙主、且在邦域之中矣、是社稷之臣也、何以伐爲」。

【社稷爲墟】國の亡ぶるをいふ。淮南子に「身死入手、社稷爲墟」。

【社】エリ、キ、渠宜切。支。

【祀】シ、シ、詳子切。紙。

【祀】シ、シ、詳子切。紙。

【祓】フ、甫無切。庚。

【祓】

キ、古委切。紙。度に同じ、山を祭る名。

【祓】カイ、ゲ、下介切。卦。たすく、たすけ(祓)。エリ、伊幾切。蕭。

【祓】ワザ、ヒ、禮記に「姦僞不萌、祓擊伏息」。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】

キ、古委切。紙。

【祓】キ、古委切。紙。

【祓】キ、古委切。紙。

【祓】キ、古委切。紙。

【祓】キ、古委切。紙。

【祓】キ、古委切。紙。

〔示部〕 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓

三 畫

【社】

シャ、セ。常者切。馬。くみあひ立春後の第五の戌の日及び立秋後の第五の戌の日の稱。江淮地方にて、母の稱。

【社日】立春後及び立秋後の第五の戌の日。春を春社といひ、秋を秋社といふ。歳華紀麗に「社日祀句龍擇元日」。

【社中】組合のうち。笑師道「分手漢上笑、擯眉社中緣」。

【社祠】國土を治むるかみ。漢書に「句龍、能平水土、死爲社祠」。

【社倉】飢饉を救ふ爲に設くる米ぐら。舊唐書に「武德元年九月置社倉」。

【社會】古は二十五家を一組とし、之を一社とせり。因つて相聚りて團體をなすを社會といふ。近思錄に「鄉民爲社會、爲立科條、旌別善惡、使有勸有恥」。

【社鼠】君側に居る奸人に喩ふ。晏子に「景公問曰、治國何患、晏子對曰、患社鼠、鼠之所以不可得殺者、以社故也、夫國亦有、人焉、人主左右是也、此亦國之社鼠也」。

【祓】

フ、甫無切。庚。

【祓】フ、甫無切。庚。

【祓】フ、甫無切。庚。

【祓】フ、甫無切。庚。

【祓】フ、甫無切。庚。

【祓】フ、甫無切。庚。

〔示部〕 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓 祓

四 畫

【祓】

キ、古委切。紙。度に同じ、山を祭る名。

【祓】カイ、ゲ、下介切。卦。たすく、たすけ(祓)。エリ、伊幾切。蕭。

【祓】ワザ、ヒ、禮記に「姦僞不萌、祓擊伏息」。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【祓】キ、ギ、渠宜切。支。

【神誨】かみのをしへ。遼史、耶律曷魯得に「夢受神誨、龍錫金佩、天道無私、必應有德。」
 【神僊】せんいん。天隱子に「能通變化曰神僊。」
 【神鳥】めり。拾遺記に「孔子相魯之時、有神鳥游集、至哀公之末、不復來翔、故曰神鳥不至。」
 【神魂】たましひ。張耒「蕭森異人境、坐視動神魂。」
 【神慮】天子のみころ。●我國にて、神のみころ。張耒「坐久神慮平。」
 【神遠】おくふかし。拾遺記に「雖未及支眞、頗參神遠。」
 【神器】帝位を代表する器。轉じて、帝位の義とす。班彪「不知神器有命、不可以智力求也。」
 【神謀】はかり知るべからざるはかりごと。歐陽詹「心匠既規、神謀創運。」
 【神機】前に同じ。後漢書に「實神機之至、會風發之良時也。」
 【神燈】かみに捧ぐるともしび。崔液「神燈佛火百輪張。」
 【神輿】みこし。宋史、禮志に「遷廟禮儀史奉神輿行。」
 【神軀】ふしぎなるかたち。嵇康「潛龍育神軀、濯鱗戲閭池。」

【神藥】神仙のくすり。(仙藥)。史記に「方士徐市等求神藥、數歲不得。」
 【神韻】すぐれたるおもむき。宋書、王敬弘傳に「敬弘神韻沖簡、識寓標峻。」
 【神靈】天子の御印。唐書に「神靈以鎮中國、藏而不閉。」
 【神靈】すぐれてふしぎなり。史記に「黃帝者生而神靈、弱而能言。」
 【神靈】すぐれたるうま。范仲淹「天産神靈、瑞符大君。」
 【神通力】靈妙にして物事を自由になし得る力。王僧孺「得六神通力、具四無礙智。」
 【神道場】墓道に立つるいしぶみ。白居易「不願作人家墓前神道場。」
 【神出鬼没】變化の速かにして、はかり知るべからざるにいふ。唐朝戲場語に「兩頭三面、神出鬼没。」
 【崇】スキ、難逢切。眞。たたる、たたり。
 【祠】シ、シ、詳茲切。支。まつる、まつり。●むくいまつる(報賽)●ほくら、やしろ(社)たま(廟)かんぬし●やしろに事ふる人●まつる神●その人の功德を仰ぎ生存中

にたてたるやしろ。
 【祠記】まつる。史記に「遂上泰山、立石封祠記。」
 【祠堂】やしろ。司馬公「漢世多建祠堂於墓所。」
 【祠壇】まつりのには。史記に「常有流星、經於祠壇之上。」
 【祠賽】神恩に對して報祭す。周禮、疏に「謂祈請求福、得福乃祠賽之。」
 【柴】サイ。柴をよきてまつること。アイ、ナイ。乃禮切。賽。福に同じ。
 六畫
 【祿】リ、ロ。兩舉切。語。山川をまつること。
 【祥】サイ、イ、ハ、ハ、よろこび(善福)●つまびらか(詳に通ず)●きざし、しるし(吉凶の兆)●喪服中の祭事。
 【祥肉】大祥として三年の喪を了りて、後の祭に供へたるに。禮記に「饋回之喪、饋祥肉、孔子出受之、入彈琴而後食之。」
 【祥社】さいはい。沈約「敬舉發天和、祥社流嘉祝。」
 【祥氣】めり。めでたき氣。張景源「祥氣與佳色、相伴雜爐煙。」

【祥風】めでたきかぜ。(瑞風)。閩丘歌に「乘春氣、御祥風。」
 【祥符】しるし。後漢書、和帝紀贊に「抑沒祥符、登顯時德。」
 【祥雲】めでたきくも。庾信「祥雲入境、行雨隨軒。」
 【祥煙】めでたきけむり。白居易「祥煙滿虛空、春色無邊畔。」
 【祥瑞】めでたきしるし。詩經、疏に「至誠感物、祥瑞必臻。」
 【祥風】よきさいはい。張華「皇化洽潤、幽明懷柔、百神輯祥風。」
 【祥鳥】めでたきしるしとして出づる神鳥。淮南子に「黃龍下、祥鳳至、醴泉出、嘉穀生。」
 【祥霧】めでたききり。范雲「終朝吐祥霧、薄暎孕奇煙。」
 【祥靈】めでたき神。郭璞「祥靈表瑞、人鬼獻謀。」

【祿】クワツ、クワツ。戸括切。曷。●クワツ、クワツ。平刮切。點。●まつり(祭)●はらひ(禱祭の名)●のつとる(法)●まつり(祭)。
 【給】カフ、ケフ。胡夾切。洽。昭穆を序る王者の大祭。禮記に「天子植符給禱、給嘗給蒸。」
 【祭】まつる、まつり。●國の名●人の姓。説文に「示に従ひ、又に従ふ、又は右手なり、肉に从ふは右手に肉を持つなり。」
 【祭文】文體の名。按ずるに、祭文は、親友を祭奠する辭なり、古の祭祀は告饗に止まるのみ、申世以來、兼て言行を讀して以て哀傷の意を寓す、蓋し祝文の變なり云云。文體明辯に見ゆ。
 【祭主】まつりのあるじ。易經に「出可以守宗廟社稷、以爲祭主也。」
 【祭祀】まつり。馮衍「殖生産、修孝道、營宗廟、廣祭祀。」
 【祭社】やしろをまつる。書經、傳に「祭社曰宜。」
 【祭具】まつりのうつは。漢書に「置祭具、以致天神。」
 【祭服】祭する時に著る衣服。禮記に「有田録者、先爲祭服。」

【祭酒】古は會同饗醕に尊長酒を以て地を祭る、之を祭酒といふ。轉じて、學政を司る長官の稱。事物紀原に「晉成寧中、初立國子學、始置國子祭酒。」
 【祭詩】唐の賈島常に歲除を以て一年得る所の詩を取り、祭るに酒脯を以てす、曰く、吾が精神を勞す、是を以て之を補ふ云云。雲仙雜記に見ゆ。戴敏「賈島祭詩忙。」
 【祭器】まつりのうつは。禮記に「祭服則則之、祭器則則埋之。」
 【祭禮】まつりの儀式。禮記に「祭禮與其敬不、足而禮有餘也、不若禮不足而敬有餘也。」
 【祭裝】まつり。晉書に「祭裝朝慶、宜正服表衣九文冠冕九旒。」
 七畫
 【祿】シン。杏林切。侵。ひのかさ、あしきき●さかんなり●さかん。謝莊「清徽就遠、祿沚方博。」
 【祿】カイ、ガイ。柯開切。仄。●カイ、ケ。居履切。佳。●カイ、ケ。居履切。佳。●樂章の名●かはらみち。●古の樂章の名。周禮に「以鐘鼓、奏九夏、有祿夏。」

【禮】レイ、ライ。里弟切。齊。○あや、のり(品節)○さしき○れいしつ○敬意を表すること。

【禮文】レイ、ミチ。のり。漢書に「周監於二代、禮文尤具」

【禮衣】レイ。儀式に用ゐるころも。王禹偁「朝服紛紛換禮衣」

【禮佛】レイ。ほとけをながむ。唐書に「獄中禮佛、口誦梵言」

【禮法】レイ。禮式のきまり。書經、疏に「次序爵命、使有禮法」

【禮典】レイ。前と同じ。周禮に「三曰、禮典以和邦國、以統百官、以諧萬民」

【禮服】レイ。儀式に用ゐるころも。漢書に「立明堂、制禮服、以興太平」

【禮制】レイ。禮儀のきまり。後漢書に「周室陵遲、禮制不序」

【禮待】レイ。禮を以てもてなす。高士傳に「魏文侯以客禮待之」

【禮律】レイ。禮法と刑律と。南史、梁武帝紀に「禮律兼修、刑德備舉」

【禮容】レイ。うやうやしきすがた。史記に「常陳俎豆、習禮容」

【禮部】レイ。官署の名。唐書、百官志に「禮部尚書一人、侍郎一人、掌禮義祭享貢舉之政」

【禮春】レイ。てあつきもてなし。唐書、蔡廷玉傳に「見禮春殊遲」

【禮教】レイ。禮儀上のなしへ。禮記に「恭

敬莊敬、禮教也」

【禮接】レイ。禮を以てまじはる。晉書、杜夷傳に「傾心禮接、引爲參軍」

【禮節】レイ。禮儀のきまり。禮記に「禮節者、仁之貌也」

【禮辟】レイ。禮を以てめしよぶ。後漢書に「教以禮辟、不能致」

【禮遇】レイ。禮を以てもてなす。北史、劉芳傳に「博聞強記、尤長音訓、於是禮遇日隆」

【禮義】レイ。事物を制裁する正しき規則。詩經、序に「變風發乎情、止乎禮義」

【禮聘】レイ。禮を以てめす。北史に「敦崇禮聘、君子所以重人倫之本」

【禮貌】レイ。禮儀のあるかたち。孟子に「夫子與之遊、又從而禮貌之」

【禮儀】レイ。禮ののり。周禮に「肆師治其禮儀、以佐宗伯」

【禮樂】レイ。禮儀と音楽と。禮記に「禮樂不可不斯須去身」

【禮數】レイ。身分相等の禮儀。左傳に「名位不同、禮亦異數」

【禮誼】レイ。人の踐み行ふべきまじき道。漢書、刑法志に「治其賦兵、教之以禮誼之謂也」

【禮願】レイ。神佛に願をかく。雲笈七籤に「請施禮願、仰希元恩」

【禮獻】レイ。禮を以てたてまつる。隋書に「天儀穆穆、禮獻既同」

【禮讓】レイ。禮儀あつくへりくだりゆるる。論語に「能以禮讓爲國乎、何有」

【禮】レイ、ミチ。尼龍切。冬。あつきまつり(厚祭)。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禮】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

【禱】レイ、ナイ。乃禮切。齊。父のたまや(親の廟)○廟にまつりたる父の稱○軍行などに捧持して行く廟主、かたしろ(行主)○地の名人の姓。

稂 サク、ソク。側角切。稂。
 ひつち、今年枯れて翌年自生する。
 りいれ。

八畫

稃 ア、エ。衣嫁切。稃。
 稻の名(稲稃)。

稄 リク、ロク。力竹切。屋。
 わせ、最も早く熟する稻。
 シン、ニン。如甚切。寢。

稅 ●みのり、穀の實ること●とし
 (年)●久しく積む、つむ。
 【稅熟】●穀物十分にみのる。張耒『田家稅熟人情好』

稆 ハイ、ベ。傍卦切。卦。
 ●ひえ、いぬびえ●こまかし、
 ちひさし(細)。

稍 【稍史】●小説の歴史。
 【稍官小説】●稍官は小官なり、小説は細粹の言なり、昔、王者がちまたの風俗を知らんと欲し、小官を置きて巷談をさぐるしめたるなり。漢書に「小説家者流、蓋出於稍官、街談巷語、道聽塗說者之所造也」

税 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稏 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稐 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稑 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稒 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稓 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

稔 ●キ、居之切。支。
 ●キ、ギ。渠之切。支。
 ●ヒトまほり(一年)●豆の莖。
 ●シヨク、シキ。丞職切。職。

〔禾部〕 稂 稊 種 稯 稰 稱 稲 稳 稴 稵 稶 稷 稸 稹 稺 稻 稼 稽 稾 稿 稽 稿 稾 稿 稽 稿 稾 稿

稊 ばやまきのいれ。
 ●チ、ゼ。直利切。眞。
 ●し●をさなき者。
 【稊子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稊子候門」

程 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【程子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、程子候門」

稌 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稌子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稌子候門」

稍 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稍子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稍子候門」

税 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【税子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、税子候門」

稏 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稏子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稏子候門」

稐 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稐子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稐子候門」

稑 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稑子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稑子候門」

稒 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稒子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稒子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稔 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稔子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稔子候門」

稓 ●い、とけなし、なまなし、わか
 【稓子】●なまなき子ども。陶潜「僮僕歡迎、稓子候門」

稈 ●クワ、苦禾切。歌。●クワ、ゲ。
 胡瓦切。馬。●ラ。管果切。智。
 ●はだかむぎ●穀のよきもの●皮のなき穀。

稉 ●リン、ロン。力錦切。寢。
 ●リン、ホン。筆錦切。寢。
 ●ふちまい、●こめぐら(腹に同じ)●うく、●事を申す●天賦の性質、さがち。

稊 ●俗に、稊を作るは非なり
 【稊告】●つげしらす。
 【稊性】●天よりうけたるたち。宣和畫譜に「陸玩字士瑤、機從弟也、稊性通雅」

程 ●往、京口、稊承計畫
 【稊承】●天子の間に、たふ。宋史に「樞密院掌、軍國機務、大事則稊奏」

稍 ●陳造、書生稊賦紙機薄
 【稊賦】●天よりうけたるたち。うまれつき。陳造「書生稊賦紙機薄」

稏 ●田聊切。蕭。
 ●しげし(密)●さかんなり(稏)●うごく、ゆるぐ●ととのふ(調)●おほし(多)

稐 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稑 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稒 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稔 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

稓 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。
 ●チウ、テウ。徒用切。尤。

【竹馬之友】竹馬をきなき時のこと。晉書・殷浩傳に「桓温語人曰、少時吾與浩共騎竹馬」又博物志に「七歳日竹馬之戲」

【竹溪六逸】李白・韓暉・裴政・張叔明・陶汚・孔巢父の六人の稱。唐書、李白傳に「客任城・與孔巢父・韓暉・裴政・張叔明・陶汚、居徂徕山、日沈飲、號竹溪六逸」

【竹頭木屑】竹のきりかぶと木のくづと。晉書、陶侃傳に「造船、木屑竹頭、悉令舉掌之、咸不解所以、後正會、積雪始晴、廳事前餘雪猶濕、于是以屑布地、及桓温伐蜀、又以所貯竹頭、作釘裝船」

二 畫

【笄】チク、トク。張六切。屋。トク。東毒切。沃。トク。慣用音。

【笄】たけ(竹)あつし(馬に同じ)。性(學)竺(學)ほとけの學問。朱熹「迷心昧公、謂佛也」馬載「獨禮竺乾」竺、謂佛也。ほとけ。馬載「獨禮竺乾」竺、謂佛也。ほとけ。馬載「獨禮竺乾」竺、謂佛也。ほとけ。馬載「獨禮竺乾」竺、謂佛也。

【笄】たけ(竹)の根。いはちたけ(刺竹)。

三 畫

【笊】ホウ、ア。蒲寧切。東。とま。ウ。雲俱切。虞。

【笊】ふえの名。禮記に「君子聽笊室蕭管之聲」

【笊】ふえとことと。禮記に「鐘磬笙瑟以和之」

【笊】ふえ。高唐賦に「緜條悲鳴、聲似笊」

【笊】チ、サ。陳知切。支。笊に同じ。

【笊】カン。古寒切。寒。古早切。早。居案切。翰。

【笊】たけざな(竹挺)おかす(干に通ず)ながら(幹に同じ、箭筈)きものかけ(衣架)かけざな。

【笊】若鸞翔平雲中。

【笊】ケイ。古奚切。齊。かすがい(髪に加ふ)かんざし(髪をさす)とあざな(髪)をつくと、女子の結婚の約とものとひたるに、いふ。禮記に「女子許嫁、笊而字」

【笊年】女子の二十歳をいふ。宋史に「福州陳氏、笊年守志」

【笊冠】かんざしとかんむりと。男女の成年に達したるにいふ。通典に「笊冠有成人之容」

【笊】カワ、ゲウ。胡交切。肴。ふえ。

【笊】ハ、ベ。浦下切。禡。伯加切。麻。

【笊】いばらだけ(竹の籬、茶のかき)まがき。劉禹錫「溪中士女出」

【笊】コ、ガ。胡故切。遇。なほまき(たけだな(肉を懸くる竹格)一種の竹)。

【笊】サン。算に同じ。

【笊】ケフ、ゴフ。極業切。業。キフ、ギフ。極入切。緝。

【笊】サフ、セフ。潤洽切。洽。ほんば、おひば。

【笊】サウ、セウ。側絞切。效。さる、いかさす(鳥の居る穴)。

【笊】シユン。筍に同じ。たけのかは。高適「筍皮笠子荷葉衣」前に同じ。元稹「風吹筍葉」

笊

トシ、ドン。杜木切。阮。さる(竹器)ちのふえ(篋)。

【笊】テイ、テ。株衛切。霽。アツ、モ

【笊】ヘイ、ネ。備稅切。霽。むち(筍)小車の具(竹の名)。

【笊】ケン、クワン。愚衰切。元。たけの名。

【笊】コツ、コチ。呼骨切。月。フ

【笊】ン、モン。武粉切。吻。アツ、モ

【笊】ツ、ツ。しやく(手)に

て、笛の孔を循づる貌。繁密なる貌、し

げし。

【笊】カウ、カウ。居耶切。陽。カウ、ガ

【笊】リ、下浪切。漾。カウ、ゴウ。胡

降切。終。竹の列らなるに

いふ。絃を竹に加ふるにいふ。竹の名

とある。架(架)竹の列らなるにいふ。

みぞかけ(架)竹の列らなるにいふ。

【笊】セウ。蘇申切。喘。わらふ、わらひ

【笊】(欣)たのしむあなどる(侮)あざ

ける(嘲)ふむ(花の咲くに)いふ。

【笊】(笑)わらひて手をうつ。魏志、鍾

蘇傳、注に「聞之驚喜、笑與拊俱」

【笊】(笑)わらふ。わらひ。李翻「假令

(笑)わらふ。李白「若待功成拂

【笊】(笑)わらふ。李白「若待功成拂

衣去、武陵桃花笑殺人」

【笊】(笑)妄りになかくなるやまひ。尹程「照鄒忌之最貌、鑑陸雲之笑疾」

【笊】(笑)わらひ。范成大「頑質買情

【笊】(笑)わらふ。孫觀「欣然一笑、破

【笊】(笑)わらひてものがたりす。孔武

【笊】(笑)あざけりわらふ。劉基「未能

【笊】(笑)わらひかたる。詩經に「燕笑

【笊】(笑)わらひあさける。黃庭堅「笑

【笊】(笑)わらひののしる。宋史に「笑

【笊】(笑)わらひたはむる。後漢書に

【笊】(笑)ふかほ。鮑照「道委長憔悴、豈

【笊】(笑)ふくば。梁昭明太子「眼語笑

【笊】(笑)外に溫和を装ひ、内に

【笊】(笑)唐書、李義府傳に「貌

【笊】(笑)外に溫和を装ひ、内に

【笊】(笑)唐書、李義府傳に「貌

【笊】(笑)外に溫和を装ひ、内に

【笊】(笑)唐書、李義府傳に「貌

【笊】(笑)唐書、李義府傳に「貌

【笊】イ。養里切。紙。

【笊】ス。主業切。紙。

【笊】たけの、竹の笊を生するにいふ。

【笊】カン、コン。沾三切。覃。古覽切。感。

【笊】竹の名。あなのなき大竹。

【笊】セ、ソ。失廉切。鹽。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

五 畫

【笊】イ。養里切。紙。

【笊】ス。主業切。紙。

【笊】たけの、竹の笊を生するにいふ。

【笊】カン、コン。沾三切。覃。古覽切。感。

【笊】竹の名。あなのなき大竹。

【笊】セ、ソ。失廉切。鹽。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

【笊】セ、ソ。七甘切。覃。セ、ソ

〔竹部〕 電 笊 笊 笊 笊 笊 笊 笊 笊 笊

【管箏】 カツラン 小見の貌。又、自らほしいま
まなる貌。詩經に「靡聖管箏」
【管說】 ヤツラン 見識のせまき言説。魏書に
「豈可輕聽管箏之說」
【管轄】 カツラン さいはひす。又、さいはいの及ぶ
はる。孫綽「綱紀居管轄之任」
【管鑿】 カツラン かぎ。周禮に「司門掌授管鑿
鑿以啓閉國門」
【管響】 カツラン ぶえのね。陳後主「野鶯添
管響、深岫接饒音」
【管籥】 カツラン ぶえ。孟子に「百姓聞王
鐘鼓之聲、管籥之音」籥は籥に同じ、
かぎ。禮記、注に「管籥、鎖匙也」
【管絃子】 カツラン 筆の異名。韓愈「蒙將軍
圍毛氏之族、拔其豪、載穎而歸、獻
俘於章臺宮、聚其族、而加東縛焉、秦
皇帝使恬賜之湯沐、而封諸管城、號
曰管絃子」
【管樂備】 カツラン 管仲・樂毅のなかま。孟
浩然「自顧躬耕者、才非管樂備」
【管鮑交】 カツラン 管仲・鮑叔の二人の情
愛ふかきまじはり。杜甫「君不見管鮑
貧時交、此道今人棄如土」
【管中窺豹】 カツラン 見る所の小なるに
喩ふ。晉書、王獻之傳に「獻之年數歲、嘗
觀門生穆繇、曰、南風不競、門生輩曰、
此即亦管中窺豹、時見一斑」

【箏】 カツツ、コチ。九勿切。物。
② コツ、グチ。吉骨切。月。

【箏】 ささら(刷)。
【箏】 サク、策に同じ。
九書

【箏】 ジヤク、ニヤク。如灼切。藥。
① くまざき。② たけのかげ。
③ セン、セン。子殿切。箏。
④ や(矢)⑤ みづどけいの壺の
中に挿したる矢⑥ すころくのさい(博
箸)⑦ のだけ、やだけ。
【箏羽】 セン ヤのはれ。溫庭筠「箏羽檜
三百萬、踴躍四海生塵埃」
【箏竹】 セン ヤにつくるたけ。晉書に「菴
木箏竹之族生焉」
【箏絳】 セン ヤがら。晉書に「以斜絹爲
書、納箏絳中」
【箏鞞】 セン ヤじり。白居易「摩弓拭箏
鞞、夜射不待明」
【箏響】 セン ヤのかすとり。儀禮に「箏響
八十」

【箏】 キン。居忍切。軫。
たけの名。
【箏】 エフ、セ、涉切。葉。
【箏】 テフ、テフ。敍涉切。葉。
【箏】 たけのふた① かみかす、ふたかす(葉
に同じ)。
② ハク、ホク。蒲角切。覺。
③ フク、ホク。甫六切。屋。

【箏】 サク、ト。治癒切。韻。② サヤ
ト。直呂切。語。
【箏】 (著に同じ)① はし② さる(被服)③
ればりつく(粘附)④ には(守に同じ)。
【箏】 サ。損果切。聲。
【箏】 むしろ(席)① たけの名② 魚
をとらふる具。

【箏】 アウ、エウ。於教切。效。② ア
グ、オグ。乙角切。覺。③ ヤク。乙
御切。葉。
【箏】 小さきふえ(小箏)。
【箏】 セウ、薛彫切。箏。
② サク、ソク。色角切。覺。
【箏】 箏に同じ① うつ(擊)② 舞曲の名。
【箏】 セツ、セチ。子結切。屑。
【箏】 ふし、てうし① みさを(操)②
こと、おこなひ(行事)③ しるし(標)④
ふてがた(符信)⑤ ためし(經驗)⑥ と
き、なり(時期)⑦ さだめ、きまり(制斷)
⑧ ほどあひ(適度)⑨ きまる、さだまる
⑩ かざる、さだむ⑪ のり(法度)⑫ しな
(琴差)⑬ かぎり、しきり(區畫)⑭ 山の
高峻なる貌、たかし⑮ いはひび(壽日)
⑯ 樂器の名⑰ 易の卦の名。
【箏】 の(Knot)
【箏】 我國にて、昔時、凶賊征討の
際、天子より大將軍へ賜はりし刀。
【箏】 斧鉞のもと。將軍のもととい

【箏】 一種の巨竹① なき(機)の具② たけ
の名。
【箏】 ヘン、メン。卑眠切。先。
たけのこし(竹輿)。
【箏】 公持節問之從輿前」
【箏】 クワイ、ケ。古對切。隊。② クワ
グ、コク。古獲切。陌。③ クワイ、
ケ。枯回切。灰。④ かたみ
(箏)⑤ とま(箏)⑥ くるまがさのほれ
(車子弓)⑦ くるまのおほひ。
ト、ツ。徒故切。遇。
かんざし(簪)。
シユン。聲九切。軫。
篳に同じ。
シヤク、サウ。息良切。陽。
【箏】 ① ば、かたみ、かけこ(篳)②
にぐら、くら③ くら(篳)④ ひさし
(篳に同じ)。
【箏】 蘇軾「家藏古今帖、黑
色照箱篳」
【箏】 前に同じ。蘇軾「蠶魚自晒、閉
箱篳、科斗長收古鼎鐘」
【箏】 シン。職深切。侵。
【箏】 カン、ケン。古斬切。謙。
【箏】 ① ぼり(針)② いましめ(箏)③ 羽の數
にいふ字。竹の名。
【箏】 をしへ。(戒訓)。庾信「夫人高
氏、箏調有儀、言容以禮」

【箏】 いましめ。たけ。孟浩然「人
生靜躁殊、莫厭相箏箏」
【箏】 いましめを記したるもの。謝
靈運「詩以言志、賦以敷陳、箏箏誅頌、
咸各有倫」
【箏】 いましむ。いましめ。柳宗元
「用圖史箏箏、以施其教」
【箏】 いましめいさむ。漢書に「開
天下之口、廣箏箏之路」
【箏】 それとなくいましむ。唐書に
「孔穎達爲皇太子令、撰孝經章句、因
文以畫箏箏」

【箏】 セイ、シャク。所景切。梗。
① 銑挺切。週。② 先青切。青。
【箏】 かご(箏篋)② くるまのてすり③ 魚を
あさる具。

【箏】 カ、ケ。古牙切。麻。
【箏】 よしぶえ(箏に同じ)① よし
(葦)。
【箏】 コ、ゲ。洪孤切。虞。
【箏】 やなぐひ、えびら(箏室)① た
けの名。
【箏】 シ。商支切。支。② イ。弋支切。
支。③ 余支切。支。
【箏】 たけの名① ころもかけ(衣架)② つく
る(几)。
【箏】 かな。爾雅に「箏謂之箏機」
【箏】 ラク。歴各切。藥。
【箏】 まがき① わんかご(箏篋)。

【箏】 サク、ト。治癒切。韻。② サヤ
ト。直呂切。語。
【箏】 (著に同じ)① はし② さる(被服)③
ればりつく(粘附)④ には(守に同じ)。
【箏】 サ。損果切。聲。
【箏】 むしろ(席)① たけの名② 魚
をとらふる具。

【箏】 アウ、エウ。於教切。效。② ア
グ、オグ。乙角切。覺。③ ヤク。乙
御切。葉。
【箏】 小さきふえ(小箏)。
【箏】 セウ、薛彫切。箏。
② サク、ソク。色角切。覺。
【箏】 箏に同じ① うつ(擊)② 舞曲の名。
【箏】 セツ、セチ。子結切。屑。
【箏】 ふし、てうし① みさを(操)②
こと、おこなひ(行事)③ しるし(標)④
ふてがた(符信)⑤ ためし(經驗)⑥ と
き、なり(時期)⑦ さだめ、きまり(制斷)
⑧ ほどあひ(適度)⑨ きまる、さだまる
⑩ かざる、さだむ⑪ のり(法度)⑫ しな
(琴差)⑬ かぎり、しきり(區畫)⑭ 山の
高峻なる貌、たかし⑮ いはひび(壽日)
⑯ 樂器の名⑰ 易の卦の名。
【箏】 の(Knot)
【箏】 我國にて、昔時、凶賊征討の
際、天子より大將軍へ賜はりし刀。
【箏】 斧鉞のもと。將軍のもととい

【箏】 一種の巨竹① なき(機)の具② たけ
の名。
【箏】 ヘン、メン。卑眠切。先。
たけのこし(竹輿)。
【箏】 公持節問之從輿前」
【箏】 クワイ、ケ。古對切。隊。② クワ
グ、コク。古獲切。陌。③ クワイ、
ケ。枯回切。灰。④ かたみ
(箏)⑤ とま(箏)⑥ くるまがさのほれ
(車子弓)⑦ くるまのおほひ。
ト、ツ。徒故切。遇。
かんざし(簪)。
シユン。聲九切。軫。
篳に同じ。
シヤク、サウ。息良切。陽。
【箏】 ① ば、かたみ、かけこ(篳)②
にぐら、くら③ くら(篳)④ ひさし
(篳に同じ)。
【箏】 蘇軾「家藏古今帖、黑
色照箱篳」
【箏】 前に同じ。蘇軾「蠶魚自晒、閉
箱篳、科斗長收古鼎鐘」
【箏】 シン。職深切。侵。
【箏】 カン、ケン。古斬切。謙。
【箏】 ① ぼり(針)② いましめ(箏)③ 羽の數
にいふ字。竹の名。
【箏】 をしへ。(戒訓)。庾信「夫人高
氏、箏調有儀、言容以禮」

〔箒〕

人の衷中につくる冠をかみがざり。キン、コン。擧欣切。文。かほしろだけ。

〔箴〕

サウ、セウ。所交切。看。サウ、ソク。色角切。覺。かち(蛇尾)。うごく(稍に同じ)。はし(ば)。さ(さ)ら(飯帯)。めし(び)。つ。ベキ、ミヤク。莫獲切。錫。くるまのと、ばしら。

〔箽〕

キヨ、ゴ。居許切。語。えびら。イ。余支切。支。チ。延知切。チ。ヤ。丈爾切。紙。たかどののほとりにあるこや。

〔箿〕

タウ、テウ。陸交切。看。おほいなるふえ。ゴ、ケ。後五切。斐。みり(捕魚具)。レイ、リヤウ。耶丁切。青。たけの名。竹の器。ソウ、ソク。千候切。宥。サク、ソク。楚角切。覺。ソク。千木切。屋。むらがる、あつまる(漢)。やのね(矢金)。餅を作るに用ある具。小さき竹。

〔箛〕

【箛】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箛者言萬物生也」。【箛】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箛者言萬物生也」。【箛】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箛者言萬物生也」。

〔箙〕

【箙】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箙者言萬物生也」。【箙】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箙者言萬物生也」。

〔箚〕

【箚】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箚者言萬物生也」。【箚】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箚者言萬物生也」。

〔箜〕

【箜】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箜者言萬物生也」。【箜】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箜者言萬物生也」。

〔箬〕

【箬】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箬者言萬物生也」。【箬】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箬者言萬物生也」。

〔箴〕

【箴】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箴者言萬物生也」。【箴】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箴者言萬物生也」。

〔箽〕

【箽】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箽者言萬物生也」。【箽】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箽者言萬物生也」。

〔箿〕

【箿】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箿者言萬物生也」。【箿】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箿者言萬物生也」。

〔箻〕

【箻】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箻者言萬物生也」。【箻】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箻者言萬物生也」。

〔箼〕

【箼】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箼者言萬物生也」。【箼】 竹。あつまり生ず。史記、樂書に「秦箼者言萬物生也」。

〔竹部〕 簞 箒 篋 籩 簋 箎 篳 篥 箛 箝 箙 箚 箜 箬 箴 箽 箿 箻 箼

〔籩〕

青篋、櫛前春樹圓團。シウ、シュ。初救切。宥。ばやし(疾)。ひとし(齊)。そ(副伴)。

〔簋〕

キ。古委切。紙。黍稷を盛る祭器。唐書、禮樂志に「進饌者、實諸豆簋」。シヤウ、ザウ。即兩切。養。七亮切。漢。わりだけ(たけ)のふだ。むしろ(席)。たけの名。

〔箝〕

シヤウ、ザウ。即兩切。養。七亮切。漢。わりだけ(たけ)のふだ。むしろ(席)。たけの名。

〔箙〕

ソク。蘇谷切。屋。茂密なる貌。ふるひ(籩)。ロウ、ル。耶侯切。尤。ク、ダ。郡羽切。斐。龍主切。斐。ののり(て)。はる(車)の弓籠。訓義に同じ。

〔箛〕

セキ、シヤク。測候切。陌。ヤウ、ソク。士角切。覺。サク、ソク。魚を刺し取る(を)り(牢籠)。やう(す)。

〔箙〕

コウ、ク。古侯切。宥。箍に同じ。

〔箛〕

素木切。歌。箍に同じ。

十二畫

〔箛〕

ハク。伯各切。陌。ハク。伯各切。陌。ハク。伯各切。陌。

〔箽〕

コウ、ク。洪孤切。虞。たけのふだ(籩)。かど(稜)けた(方)。

〔箿〕

ヘイ、ヘ。必決切。霽。すごろくのさい。フク、ホク。方六切。屋。じれん(竹實)。

〔箽〕

おほいなるたけ(大竹)。レウ、ロウ。連條切。蕭。まつりのにく(を)る竹器。

〔箿〕

タン。多寒切。寒。ば(こ)かたみ(小箛)。ひ(さ)。

〔箿〕

衣類を入るるはこ。駱賓王「單箿無餘、朝夕之歡宴」。單箿。飯をもる器と酒をいれる器と。論語に「單食」。

〔箿〕

食を竹器にもり、漿を壺に入る、旅行の用意。孟子に「單食壺漿、以迎王師」。テン、テン。徒玷切。瑛。たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

〔箿〕

たかむしろ(竹)の名。

